参考資料3

平成30年度「国際バカロレアに関する国内推進体制の整備」

―委託業務成果報告書―

平成31年3月

株式会社アオバインターナショナルエデュケイショナルシステムズ
アオバジャパン・インターナショナルスクール

目次

0. はじめに(国際バカロレア推進に基づくこれまでの取り組みを踏まえて)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

1. 2018年度文部科学省 IB 教育推進コンソーシアム業務報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

1－1. 文部科学省 IB 教育推進コンソーシアム運営業務・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

1－1－1. 関係者協議会の開催

1－1－2. 関係者協議会における国際バカロレア推進のための諸課題の把握

1－1－3. 国際バカロレアをめぐる課題の把握および優先課題と課題解決のための アプローチ

1－1－4. 関係者協議会の議論を踏まえたコンソーシアム事務局としての短期・長期的なミッション

1－2. 国際バカロレア教育の効果に関する調査研究業・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19

1－2－1. IB普及に関するアンケート調査

1－2－2. 国際バカロレアを活用した大学入学者選抜例の調査について

1－3. 国際バカロレア導入を検討する学校等への支援業務 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30

1－3－1. 国際バカロレアの認定校の現状について

1－3－2. IB導入校・関心校・自治体へのヒアリング訪問の実施

1－3－3. IB教育のサンプル授業動画の撮影について

1－3－4. IBENメンバーの候補者選定の協力について

1－3－5. IB理解促進の啓発活動の実施

1－4. ICT プラットフォームの構築・運営業務・・・36

1－5. シンポジウム等の開催業務 ・・39

2. 業務運営における次年度以降の課題・改善点等・・57

3. 付録

第1回～第3回の関係者協議会資料一式

0. はじめに（国際バカロレア推進に基づくこれまでの取り組みを踏まえて）

昨今の日本における教育改革における動向のひとつに、初等中等教育の現場では、アクティブラーニングの視点からの授業改善として、主体的で対話的で深い学びの実現に向けての学習指導要領の改訂が進められてきた。また、高等教育の現場においては、高大接続改革として社会で自立して活動していくために必要な「学力の3要素」を多面的かつ総合的に評価することの必要性が求められてきた。また第三期教育振興基本計画の策定においても、その基本的な考え方において社会の持続的な発展を牽引するための多様な力の育成を目指すことを掲げており、グローバルに活躍する人材の育成が必要であることが示されている。

国際バカロレア（IB）は、グローバル化に対応した人材を育成するための国際的な教育プログラムであり、我が国では、「日本再興戦略−JAPAN is BACK−」（平成25年6月14 日閣議決定）において、IB認定校等の大幅な増加を目指す等の目標が設定され、IBの普及・拡大のための取組が推進されてきた。また、その普及の取り組みの一環として、平成25年5月より、東京学芸大学を中心に、IB、特に日本語DPの導入等に向けた情報共有等のための「国際バカロレア・デュアルランゲージ・ディプロマ連絡協議会」が設立された。連絡協議会においては日本語DP等に関心を持つ高等学校・中等教育学校等の関係諸機関の連携ならびに協力を図るとともに、連絡協議会で培うネットワークも活用し、高等学校及び中等教育学校等においても導入可能な日本語DPのモデルプログラムの開発やグローバル化に対応した教員養成の在り方等について検討及び情報共有を行ったうえで、IBの振興に取り組んできた。一方で、文部科学省がとりまとめた「国際バカロレアを中心としたグローバル人材育成を考える有識者会議中間取りまとめ」（平成29年5月）においては、連絡協議会の機能をさらに強化させたうえで、すべてのIBプログラムの振興において全国的な連携と地域における中核拠点の役割にも留意しつつ、より包括的で実効的な連携体制となるコンソーシアムの形成が重要であると提言された。

コンソーシアムを通じて、日本語DPのみならずIB教育全体（PYP、MYPを含め）の好事例を波及させることで国内の初等中等教育の発展に資するはもとより、IB 校以外の学校を含めて実践事例や教育効果の情報共有が可能となると考えられる。さらに、IBの理念及び教育カリキュラムと、日本の教育政策の方向性は親和性が高く、コンソーシアムとして国際バカロレアの普及ならびに促進を進めていくことで、国際バカロレアのプログラムと日本の教育カリキュラムの相互発展を通じたグローバルな日本型教育の海外展開にもつながってくると考えらえる。

このため、文部科学省委託事業として実施する文部科学省 IB 教育推進コンソーシアム（以下「コンソーシアム」という。）においては、関係者間での情報共有を図るとともに、IB導入を検討する学校（主に1条校）等に対する支援、IB教育の効果に関する調査研究の実施、IBの社会的な認知ならびに内容理解の促進のためのICTプラットフォーム構築及びシンポジウムの開催等を通じ、国内の国際バカロレアの普及・促進活動を行うことを目的とする。

【委託事業内容】

（1）文部科学省IB教育推進コンソーシアム運営業務

国内のIB認定校、IB候補校だけでなく、IBに関心のある学校や地方公共団体のニーズや課題を解決するための会議体を運営する。

（2）国際バカロレア教育の効果に関する調査研究業務

IB教育の普及状況について調査を行う。また、IB教育の国内における実践事例や、日本の教育とIB教育の高価に関する比較等の調査研究を行う。

（3）国際バカロレア導入を検討する学校等への支援業務

IB導入に関心を持つ学校や教育委員会に対して、IB認定に向けた情報提供を行う。また、IB認定手続きに関するマニュアルをアップデート・整備しする。

（4）ICTプラットフォームの構築・運営業務

IBに関心を持つ一般の方を含めた国内のIB関係者間の情報共有を目的としたICTプラットフォームを構築かつ適切な運営を行う。

（5）シンポジウム等の開催業務

IB教育に関する情報発信の場として、IBに関するシンポジウムを年に1回、またIB普及を目的としたカンファレンスを年に1回開催する。

＊上記の運営は、文部科学省と国際バカロレア機構との協議に基づき実施される。

【事務局としての運営業務】

1. 関係者協議会の運営（会議に係る庶務、国内関係機関との連携）
2. AirCampus®の運営
3. 教育実習・授業見学の企画運営
4. シンポジウムの企画運営
5. 一般向けサイトの運営

1．2018年度文部科学省 IB 教育推進コンソーシアム運営業務報告

1－1．関係者協議会の運営内容

【関係者協議会の趣旨】

国内のIB推進において、それぞれの関係者が抱える課題は多岐にわたる。IBプログラムの導入を薦めたい学校ならびに自治体が抱える課題、生徒ならび保護者がIB教育に関する情報を得ようとするための情報環境の課題、大学入学者選抜におけるIB活用促進の課題、IBの普及と同時にIB教育に携わる教員養成の課題、IB履修に伴う経済的負担の課題、企業におけるグローバル人材育成における課題など様々である。それゆえに、これらの諸課題を念頭においたうえで、IB教育の普及に係る取り組みを各関係者間で検討し、1条校等でのIBの導入および運営に対する効果的な支援を行う等の機能をもつ、持続的な普及促進体制の核となる取り組みをコンソーシアムを通じて構築することを目指す。

【協議事項について】

協議会における主な協議事項としては下記の2点を設定している。

①国内の国際バカロレア導入の状況及び関連する課題を把握するとともに、その現状・将来に　係る解決策（学校教育法第 1 条に定める学校に係る詳細な現状や課題・解決策を含む）について検討を行い、文部科学省その他関係者に対し提案を行う。

②コンソーシアムにおいて実施される取組の状況やその運営方針等を把握し、必要な改善策等　について助言を行う。

関係者協議会における協議事項に基づいた議論および提案された内容を踏まえて、コンソーシアム事務局がIB機構をはじめとする各関係機関との十分な連携を図った上で、具体的な課題解決のための方策に取り組んでいく。

【構成員について】

コンソーシアムという性質上、関係者協議会の構成員は、下記の要件のいずれかを満たす主体の代表者にて構成する。構成員には、IB教育に携わる学識関係者のみならず、企業等においてグローバル人材の育成に専門的かつ幅広い知見を有する関係者も招き、国内におけるIB教育に係る課題およびそれらをとりまく実社会からの視点でIB推進の意義、それらをめぐる諸課題の整理と把握ならびに具体的な解決策のための助言をいただく。

ア　国内の国際バカロレア認定校

イ　国際バカロレア導入を検討している主体（国際バカロレア候補校、関心校、教育機関、地方公共団体等）

ウ　国際バカロレア資格取得者の受入れ主体（大学・企業等）

エ　国際バカロレアに関係する活動・事業を実施する団体

オ　国際バカロレアに知見を有する有識者および実務家教員

また、上記の構成員以外にも、IB推進に係る関係者を傍聴者として適宜招聘したうえで、関係者協議会としての役割ならびに今後の展望などについて理解をいただく機会を設けることとする。

【2018年度構成員メンバー】

＜会長＞

岩崎 久美子	放送大学教授

＜会長代理＞

田原 誠	岡山大学副学長
日色 保	日本マクドナルド株式会社　フィールドサービス本部　上席執行役員

＜構成員＞

相沢 克明	市立札幌開成中等教育学校校長
荒屋 勝寿	聖ヨゼフ学園小学校校長
江里口 歡人	玉川大学教授／日本国際バカロレア教育学会副会長
大迫 弘和	都留文科大学特任教授
荻野 勉	東京学芸大学附属国際中等教育学校校長
河合知成	法政大学国際高等学校副校長／IBAJ共同代表
坪谷・ニュウエル・郁子	東京インターナショナルスクール理事長／日本IBアンバサダー
濱田 啓太郎	神奈川県教育委員会　高校教育課長
ネルソンフミコ	リンデンホールスクール中高学部DPコーディネーター
渡辺 寿之	サニーサイドインターナショナルスクール園長／IBヘッド・カウンシル委員

＜オブザーバー＞

星野あゆみ	玉川大学教授／国際バカロレア機構日本担当地域開発マネージャー
宮本 拓人	文部科学省大臣官房国際課国際協力企画室長（2019年1月22日以降）
原田 大地	同上（2019年1月22日まで）

【2018年度の関係者協議会における主な検討事項】

―IB普及・促進をめぐる諸課題の把握および論点整理

―諸課題に関する検討分科会（ワーキング・グループ）の設置

―分科会による諸課題の整理ならびに課題解決アプローチの提案

＜関係者協議会の様子＞

１－１－１. 関係者協議会の開催経緯

【今年度の文部科学省IB教育推進コンソーシアム関係者協議会の開催経緯】

第1回（2018年9月17日）

1. 関係者協議会の開催及び運営について
2. 文部科学省における取組状況について
3. 主な検討事項について
4. AirCampus®の活用について

第2回（2018年12月7日）

1. 主な検討事項における論点整理ならびに5か年計画について
2. 各論点整理に関する議論
3. コンソーシアムの短期的・中長期的なミッションならびに行動計画について

第3回（2019年2月22日）

1. 第2回関係者協議会を踏まえた検討事項の整理（各分科会からの報告）
2. 検討事項の優先順位
3. 個別課題に関する議論

１－１－２. 関係者協議会における国際バカロレア推進のための諸課題の把握

【国内におけるIB推進のための諸課題の把握について】

第1回の協議会においては、関係者協議会としての主な検討事項の確認を行ったうえで各構成員より今後の期待されるコンソーシアムとしての役割について幅広く意見共有を行った。その中で次のような諸課題が国内における今後のIB推進において向き合うべき課題であると指摘された。

①生徒・保護者へのIB教育に関する情報提供
②DP試験費用等の補助について
③自治体へのIB導入に必要な資料提供
④教員養成のための必要な施策について
⑤企業家の視点からグローバル人材の必要性
⑥IB 導入の事例からみえる諸問題

＜①生徒・保護者へのIB教育に関する情報提供＞

国内の生徒ならび保護者にとってその多くが日本の教育は身をもって理解しているが、IB教育についてはどのような教育カリキュラムであり、それが既存の日本の教育と内容的にどのように異なるのかなどについて十分な情報を得られていない現状がある。それらを背景としたうえで、会議においては構成員より次のような指摘があった。

・どの学校で IB プログラムを導入しているのかについて、生徒・保護者に対してさらに積極的に情報発信をしてほしい。それに伴って、IB 大学入試の情報も積極的に発信していくべきである。日本の大学での IB 修了生の受け入れは増えつつあるので、入試情報をもっと発信すべきである。

・保護者向けに IB 教育の理解を促すワークショップを各地で開いていく必要がある。

・IB 入試に関しては、医学部の IB 入試枠が少ないという理由で、IB コースへの進学をあきらめる事例がある。

＜②DP試験費用等の補助について＞

IBプログラムを受ける生徒は従来の日本の教育を受ける生徒に比べて、プログラムの履修（特にDP）に伴う試験費用や学習におけるIT機器の購入等での負担が発生する。その点を踏まえて、会議においては構成員より次のような指摘があった。

・相対的貧困家庭向けの支援策として、DP 受講生への最終試験費用を支援する制度の提案

（一案:コンソーシアム会員による互助会制度）

＜③自治体へのIB導入に必要な資料提供＞

多くの公立校においては、各学校による裁量においてIBプログラムの導入の是非が議論されるのではなく、教育委員会ならびに自治体における合議のもとで、導入が検討されている。そういった状況の中で、IB導入においては、自治体側への十分な資料提供が重要となってくる。。その点を踏まえて、会議においては構成員より次のような指摘があった。

・各地域において IB 導入の見通しが立てられるように、認定校になるための必要経費などの情報を発信していくことが重要である。

・自治体で IB 導入を進めていくにあたっては、税金が投入される背景もあり学校設置の意義や設備投資の必要性等について地域住民に理解を求めていく必要がある。同時に、県議会への説明や県知事の理解を得る必要もある。また、力量のある IB 教員の確保や養成をどのように進めていくのかという課題と対峙している現状もある。

＜④教員養成のための必要な施策について＞

IB校を増やしていくうえでも、その教育に携わる現場の教員をいかに要請していくことかが重要である。IB機構による教員研修を目的としたワークショップも開かれているが、同時に現場の学校独自による教員研修の取り組みや大学の教員養成においてIB教育に従事できる教師教育を進めていく必要がある。その点を踏まえて、会議においては構成員より次のような指摘があった。

・日本でも IB 教員養成の学部および大学院はあるが、コンソーシアムの活動においても IBO との連携を図った上で様々なアプローチによる教員養成の方策を見出していく必要がある。

・従来の知識詰込み型の授業スタイルから脱却できる IB 教員の育成が必須である。また、各学校における IB 教員同士のネットワーク構築の場もコンソーシアム内で設ける必要がある。

＜⑤企業家の視点からグローバル人材の必要性＞

IB教育は語学力のみでなく、コミュニケーション能力や異文化を受容する力、論理的思考力、課題発見力などが身につくと期待されており、経団連をはじめとした一部の企業関係者からはIB教育がグローバル人材を育成する上で有効な手段の一つであるという認識を得ている。その背景を踏まえて、会議においては構成員より次のような指摘があった。

・企業の中では IB に関する浸透が依然として薄い。大学までにどのような学習歴があるのかを評価する会社が少ないのため、IB 人材の PR がさらに必要である。今後の社会では、イノベーションが出来る人材が必要であるため IB 教育は社会のニーズと合致している。コンソーシアムとしてのミッションをいかに社会に浸透させることができるかが重要である。

・ 企業経営においても、そのミッションが何かをしっかりと把握することが大切である。同じようにIB 普及においても、コンソーシアムでのミッションが何かを各自が理解することが重要である

＜⑥IB 導入の事例からみえる諸問題＞

これまでの①～⑤におけるそれぞれの諸課題には該当はしないが、国内のIB導入をめぐる事例として下記のような意見も構成員より寄せられた。いずれもIB導入において各学校が抱える問題であり、コンソーシアムとしてどのような解決のための方策が立てられるかが重要となる。

・勤務校では IB と学校理念がおおよそ合致していたので導入し易かった。ただし、IB 教員の獲得の難しさも壁になっていることもあり、力量のある教員の採用や養成が課題である。

・ IB の導入をあきらめてしまう学校の事例もある。特に私立学校では、その経営判断において理事会の存在が大きい。IB 教育にどのようなインセンティブがあるのかを学校、生徒、保護者の視点で整 理する必要がある。（例：ディプロマを取ることでどのようなメリットがあるのか？）

・「平成24年国際バカロレアの趣旨を踏まえた教育の推進に関する調査研究」の指定校（5校）の うち、実際には1校しか IB 認定校になれていない実情がある。IB 導入に踏み切れなかった理由を 把握する必要がある。

1－1－3. 国際バカロレアをめぐる課題の把握および優先課題と課題解決のためのアプローチ

【分科会（ワーキンググループ）の発足：課題の把握および優先課題と課題解決のためのアプローチ】

第2回の関係者協議会においては、第1回の会議において指摘されたIB推進の課題である6つの点にさらに焦点を当て議論を重ねた。そのうえで、構成員およびAirCampusのファシリテーターによる分科会（ワーキンググループ）を発足させた。最終的には、各分科会において取りまとめられた諸課題の把握および取り組むべき優先課題と課題解決のためのアプローチが下記の通り提案された。

＜分科会1：生徒・保護者へのIB教育に関する情報提供＞

①課題の把握

・生徒・保護者へのIB教育に関する情報提供

←生徒保護者の概念が広いため、情報発信においてもターゲットを絞る必要がある。

・IBスコアを活用した入試の発信

←IBスコアを活用したといっても、各大学のスコアの活用状況は様々であり保護者には理解しづらい点がある。全体的な認知不足も含め、引き続き入試に関する情報を発信していく必要がある。特にDP修了生などの進学情報を各IB校間にて共有する必要がある。

・保護者向けのIBセミナー実施の必要性

←IB教育を理解している保護者であっても進路への不安を持っている。特にDP校初期段階における保護者の持つ不安に学校側が寄り添えていない。情報共有という面では、海外在住者や帰国生徒の保護者への　アプローチも不十分である。

・奨学金等の情報共有不足

←DP修了生が、どのような奨学金制度を活用して、どのような大学に進学することができるのかに関する情報が必要である。

②優先課題の選定

・情報共有のターゲット層とその方策について

←どの層の「生徒・保護者」に、どのような媒体を使って、どのような情報を発信していくのかを決めていくこと。

・大学進学に関する適切な情報共有

←進路に不安を持つ生徒や保護者も多く、IB入試の情報を正確に伝えること。あわせて、IB入試を受ける生徒の負担感（特に求められる提出物も含めた受験による負担感）を大学側に共有すること。

・IBに関する一般的な啓発活動

←保護者による関心や疑問を明確に受けとめるセミナーを実施していくこと。

・一元化したIB情報共有の仕組みづくり

←まとまった情報が少なすぎる現状の改善をしていくこと。

③課題解決のオプションの提示（課題解決のための具体的な方策の提示）

・地域におけるIB認定校の牽引的な役割

←これまでに各学校で行われていたIBの説明会をプログラム対象別に整理したうえで、内容を各学校間で共有できるようにする。また、IB認定校に対して、地域における牽引的な役割（IB啓発や授業公開等）を担ってもらうように要請する。

・大学に対するIBへの適切な理解の促進

←大学側がDP生の能力を入学後にどのように活かしているのかをコンソーシアムを通じて発信する。また、その動きが2020年入試改革の文脈の中でどのように位置づけられているのかを整理する。

・保護者向けのIB理解啓発セミナー等の実施

←各IBプログラムがどのような点において新学習指導要領と親和性があるのかをコンソーシアムとして整理したうえで、保護者を含め一般にも共有する。また、その他のIBに関する質問に対応したFAQページをコンソーシアムのサイト内に設ける。さらに帰国生向けの合同説明会においてIBに関する情報を共有するブースを設ける。

・奨学金情報の共有

←奨学金を提供する組織の情報収集と内容の整理をコンソーシアムを通じて発信する。また、海外進学に関する情報をコンソーシアムのホームページ上に設けたり、海外大学進学に関するセミナーを開催したりするなどして推進していく。

＜分科会2：IBに関する財政支援策＞

①課題の把握

・IBを履修する際の経緯費負担

←国内の認定校数は増加の一途を辿っており、当初は国内のインターナショナルスクールが中心であった　が、私立や国公立の1条校でもIBプログラムを導入する学校が増えてきている。また、認定校数が増えることで、子どもたちがIBプログラムを選択できる環境が整ってきているといえるが、IBのディプロマ　プログラム（DP）では最終試験を受ける必要があり受験に係る経費は個人の負担となってしまうことが課題である。

・相対的貧困家庭へのIB履修のための経済的支援の必要性

←子どもたちが家庭の経済的事情によらずIBプログラムを選択できるよう財政支援策を考えていきたい。一方で、財源の確保については、日本国内におけるIBの認知度は必ずしも高いとは言えず、また、高校までのプログラムであることから、経済界からの支援を受けることは難しい。

・コンソーシアムを中心とした支援スキームの確立

←支援スキームや財源の確保には、運営組織があることが必須である。運営をIB認定校による持ち回りとするとスムーズな運営に懸念があるため、当該組織をコンソーシアム内に置くことが妥当だと考えられる。

・経済界からの支援の難しさ

←経済界においてはIB認知度は依然として低く、また各企業としても（直接の採用活動に結び付きづらい面もあり）IBの奨学金事業への協力における費用対効果を感じられにくい点がある。

②優先課題の選定

・財政的な支援のスキームの策定

←財政支援を行う家庭においては、世帯収入等の状況で下記のような優先順位をつける。

1．高校生等奨学給付金受給者（生活保護（生業扶助）世帯、住民税所得非課税世帯）

2．世帯収入に応じた段階的な区分（300万円以下、400万円以下など）

また支援対象となる費用を財源に合わせて優先順位をつける。

―最終試験の登録料

―最終試験の科目毎の試験料（コア試験料を含む）

―PCやグラフ電卓などの必須な器具備品

―IBの活動に係る授業料以外の教育費（個人負担となる学校活動費など）

―IBコースに係る追加の授業料

③課題解決のオプションの提示（課題解決のための具体的な方策の提示）

・大学との連携：大学が参加するIB生のリクルートフェア等のイベントを有償で開催

・企業からの寄付：企業から寄付もしくはイベント等への協賛などのスポンサー費を集める

・IB認定校との連携：各学校におけるCAS等の活動と連携して寄付を集める

・互助会：IBを受ける生徒を持つ家庭から500円～1，000円ずつ集める

・コンソーシアム事務局の内において財源支援の組織を設けることへの提言

＜分科会3：自治体へのIB導入に必要な資料提供＞

①課題の把握

・教育委員会事務局における設置に向けた合意形成

←IBへの理解（教育プログラムの概要、必要な施設・設備や人材）、公立高等学校に設置する意義と設置の方向性の確認、設置校の検討（既存校か新設校か等）と設置計画策定（検討組織構成、設置計画の策定等）

・首長及び議会への説明

←IB校の設置計画についての自治体の長の理解ならびに議会への十分な説明の必要性

・教育委員会における設置計画の決定

←設置の方向性の説明、設置計画の付議ならびに決定等について

・必要な予算の確保

←設置計画を具体化する予算の検討、予算担当部署との調整、予算案の議会での承認等

・ 指導できる人材の確保

←教員の育成（ワークショップへの参加）ならびに教員採用等

・ 設置校における指導計画（ユニットプランなど）と評価計画の作成

・ 入学者選抜に関する検討・決定

←選抜方法の検討、選抜実施要領等の策定等

・地域、当該校保護者、中学校や中学生とその保護者への広報

←IB校の設置に関する広報ならびに入学者選抜に関する広報

・IBの教育の成果と課題の共有

←問題発見・解決能力等の資質・能力の育成に資する取組の他校への還元

・DPスコアで進学できる国内および海外大学の情報提供と進路指導事例の共有

・ SGH、SSH 等の他のグローバル人材育成施策との連携

←グローバル人材育成関連事業とIB教育推進との親和性の明確化

・PYP、MYP、DP の内容と学習指導要領との整合性を図る業務の軽減

②優先課題の選定

・教育委員会事務局における設置に向けた合意形成

・首長及び議会への説明

・予算の確保

←施設、設備、人件費、IBプログラム認定ならびに継続費用等の検討、担当部署との調整、議会の承認）

・ 指導できる人材の確保

←教員の育成（ワークショップへの参加）ならびに教員採用等

・DPスコアで進学できる国内および海外大学の情報提供と進路指導事例の共有

・ SGH、SSH 等の他のグローバル人材育成施策との連携

←グローバル人材育成関連事業とIB教育推進との親和性の明確化

・PYP、MYP、DP の内容と学習指導要領との整合性を図る業務の軽減

③課題解決のオプションの提示（課題解決のための具体的な方策の提示）

・教育委員会の合意形成に向けた各種支援策の明確化（IB 校支援パッケージの提示）

＜以下、コンソーシアムから国に働きかける事項＞

○IB等教育推進の姿勢の明確化

←SGH、SSHも含め、新学習指導要領の趣旨に基づく教育であることの明示

○国内大学に対するDP 入試枠拡大の働きかけ

○教育課程の特例申請の負担軽減

←国によるIB プログラムの内容と学習指導要領の整合性の包括的な認証等

○IB の確実な実施に向け必要な予算と教員定数の確保

←IB 交付金やIB 教員加配の新設など

○教員研修の支援施策の実施

←ワークショップの割引価格の設定、関心校・候補校教員の受講料無料化など

＜以下、コンソーシアムが中心となって取り組む事項＞

○IB 推進支援機構（仮称）の設置による取組

←IBスコアによる海外大学進学に向けた進路指導に関するノウハウの集約と提供、

国内IBO 公式ワークショップ開催に向けたノウハウの提供と調整、英語ネイティブ教員のリクルート情報等の集約と提供など

・これからの社会に求められる資質・能力の育成におけるIB実施の意義の提示

＜分科会4：教員養成のために必要な施策について＞

①課題の把握

・IB導入を行う中等・高等教育校教員に対する研修

←IB教員としての活動には，IBの理念，教育目的，学習内容の理解や教育方法の修得が欠かせない。さらに，IB教育は，学習者に学ぶ方法を体得させることを目標に，探究，概念理解，地域・グローバル協働などに重点を置いた指導を行う。このようなIB教育の特徴は，日本の従来の学習・指導方法とは異なるため，IB導入を目指す中等・高等学校では担当教員に対する体系的な研修が欠かせない。

←日本語で教科を担当する教員であっても，ディプロマ・コースには英語による授業が2科目以上あるので，英語の運用能力は必要であり，その研修は欠かせない。

・国際バカロレア教員養成コースの拡充

←IB教員の養成は大学などのIB研究コースでも進められている。このコースはIBが認定するものであり，教育理念ばかりでなく，総合的な知識・技能を備えたIB教員の養成が期待される。このような教員養成コースは，現在8大学で設置されているが，1）の教員の研修先としても相応しいので，地域の教育学部を持つ中核的な大学にもその設置を広げるなどの対応が重要である。

②優先課題の選定

・IBワークショップの定期的な開催と参加促進策

←地方都市での開催，参加費補助など

・科目横断的に必要な知識・技能などを養う科目のワークショップのIB導入予定校内での開催

←ATL(Approaches to teaching and learning),、TOK(Theory of Knowledge)などの日本語による開講

・国際バカロレア教員養成コースの地方中核大学での設置

③課題解決のオプションの提示（課題解決のための具体的な方策の提示）

・IBワークショップの定期的な開催と参加促進策

←IBワークショップの参加はIB導入予定校の教員にとって，必須であり，最も取り組みやいものである。このため，従来の実施方式を一部修正し，地方の中核的な都市の大学などで一定の期間，さまざまなセッションを組み合わせて開催し，費用的な負担（参加費，旅費，滞在費など）を抑えて，複数のセッションに参加できるようにする。その際，参加費の公的な補助を期待する。

・科目横断的に必要な知識・技能などを養う科目についてのワークショップのIB導入予定校内での開催

←ATLやTOKなど科目横断的に必要な教育方法や科目について，IB導入予定校内の関係教員全員を対象に体系的に実施する。これを日本語で実現するために必要となる指導員と教材の開発を促進する（IB機構などに依頼する。）。

・国際バカロレア教員養成コースの地方中核大学での設置要請

←地域の教育学部を持つ中核的な大学に国際バカロレア教員養成コースの設立を求める。コースはIB教員の養成に貢献するばかりでなく，附属学校においてPYP，MYP，DPに関連した教育が導入される。地域の教育系の大学の取り組みは，IB教育の草の根的な普及を促すものであり，実行計画をコンソーシアムで立案し，文部科学省には政策的な対応を依頼する。

＜分科会5：教員養成のために必要な施策について＞

①課題の把握

・これからの企業活動を考える上で押さえておくべき環境要因

a. 少子高齢化と生産年齢人口の減少、さらにそれに伴う移民政策の変化

b. グローバル化の進展

c. VUCA World – 不安定性、不確実性、複雑性、曖昧性を増す、先が読めない社会

d. デジタル化とソーシャル化

e. 技術革新（AI、Robotics）

・企業が今後直面する課題

a. 生産性の向上

b. グローバル人材の育成、Diversityへのさらなる取り組み

c.「正解のコモディティ化」– いかにイノベーションを通じて差別化を図るか

d.「Winner takes all」– 3番手以下では生き残れない

e. 刻々と変わる技術ベース・競争環境の変化への対応

②優先課題の選定

今後の様々な変化の激しい社会に対応できるグローバル人材にとって必要な下記の資質ならびに能力を育むことが産業界全体において期待されている。

・本質を見極める能力の育成

←手続き的知識やスキルの適用を通した定型問題の解決だけでなく、異なる知識を関連付けた深い概念的な本質の理解を基にした非定型問題の解決ができる人材が今後は必要になる。

・問題発見・課題設定能力の育成

←既に与えられている情報や問題解決策を盲目的に追認するのではなく、深い洞察力をもって混沌とした状況の中から全く新しい価値創造の可能性を見出し、挑戦的で野心的な課題を設定できる力。

・グローバル・マインドセットの育成

←多様な価値観や文化的背景に対しての寛容な理解を持ちつつも、壁を作ることなく、個々の強みを活かして組織としてのアウトプットを最大化できる包容力に富んだリーダーシップを育成する。

・変化に対する柔軟性

←容赦なく変化する事業環境・前提条件から目をそらさずに現状を直視し、それまでのやり方に固執することなく柔軟に対応する能力。

・つながり、統合する力の育成

←もはや個人や一企業で解決できる範囲には限りがある。複雑に絡み合った問題に対し、多様な知恵と人材をボーダーレスに世界から集めて統合し、システム思考やデジタル技術を駆使してダイナミックに解　決していくスキルが求められる。

・グローバルに通用するコミュニケーション能力

←多様な価値観や人材が集まる組織において、相手の意見をしっかりと理解してその主張に寄り添いながらも、自己の主張するポイントをしっかりとぶつけて説得できるディベート力や、対個人、対集団の異なるセッティングにおいて高い共感を得られるようなスピーチ能力を併せ持つ人材がグローバルに通用するリーダーの要件。

・高い自己規範と哲学

←「理・正・知」に集約される科学的かつ合理的な論理による差別化だけでなく、「真・善・美」に表されるような、リベラルアーツや哲学、美意識に裏打ちされた感性が、顧客を感動させるイノベーションのベースとなる。また、それらを貫く理念や高い行動規範が企業のインテグリティーを担保する。

③課題解決のオプションの提示（課題解決のための具体的な方策の提示）

・本質を見極める能力の育成

・問題発見・課題設定能力の育成

・グローバル・マインドセットの育成

・変化に対する柔軟性

・つながり、統合する力の育成

・グローバルに通用するコミュニケーション能力

・高い自己規範と哲学

1－1－4. 関係者協議会の議論を踏まえたコンソーシアム事務局としての短期・長期的なミッション

これまでの関係者協議会における議論を踏まえ、コンソーシアム事務局として短期的ならびに長期的なミッションを設定し、具体的な活動計画案を協議会にて提案した。

【短期的なミッション】

・IB導入を検討する学校等への支援

－IB関心校への必要な情報共有（Air Campus®の運用）

－ 地域でのIB に関する普及啓発活動（例：IB理解促進セミナー）

・国内大学におけるIBの活用の推進

－IBスコアを活用した入試設計に関する適切な情報共有

例：IB機構との連携による入試担当者向けセミナーの開催）

－コンソーシアムHPでの各大学の入試概要の掲載

・国内におけるIB教員養成・研修機会の充実

－各IBプログラムの教員養成に対する方策

例：大学における教員養成、IBワークショップの充実、校内におけるOJTによるIB教員研修 等

【長期的なミッション】

・IB教育の効果の調査研究

－国内におけるIB導入の効果を検証するため、一条校を中心とした調査研究を実施

・柔軟なIBカリキュラムの履修の支援

－日本語DPにする履修科目制限の緩和等

・DP資格の大学単位認定

－国内の大学におけるDP科目の大学科目単位認定

・外国人教員の適切な処遇と確保

－特別免許状等の制度活用の促進（都道府県教育委員会への働きかけ）

・グローバル人材育成施策等との連携

－SGU、SGHやSSHをはじめとしたグローバル人材育成施策との連携

・企業によるIB教育に関する理解醸成と評価

－企業をはじめとする実社会におけるIBの認知・評価の向上

【行動計画案】

・IB導入のための支援パッケージの提供と母集団の形成

←IB申請準備校を対象に下記のような支援パッケージの提供（事務局案）

―IB機構によるワークショップ参加に係る支援

―教員養成における支援（教育実習・インターン制度の整備）

―コンソーシアム事務局によるIB教育の理解促進説明会等を実施

（例：保護者向け説明会の実施支援、IB導入に向けた理事会および自治体議会の意思決定プロセスの事例紹介）

―教員採用の支援（AC上で採用情報共有など）

＊対象校に、コンソーシアムが支援先の状況に応じて支援パッケージを提供して総合的にIB導入を支援する。（例：関心校段階、候補校段階、自治体検討段階 等）

＊IB認定校、候補校が1つもない自治体（都道府県）への働きかけも同時に行う。

＊特に自治体へは、地方創生関連事業に絡めて学校再編の形でモデルを提案する。

１－２. 国際バカロレア教育の効果に関する調査研究業務

国内におけるIB教育の普及および促進を目指し、それらに関する諸課題把握のために必要な調査研究を行うことはその推進において重要である。そのため、今年度においては、コンソーシアムにおける情報共有を目的としたICTプラットフォーム「AirCampus®」の利用者を対象にIBに関する関心意識ならびに有効な情報共有の在り方を調査するためのアンケートを実施した。また、大学を対象として、IBスコアを活用した大学入学者選抜例の調査に取り組んだ。国内におけるIB修了生に対応した入試動向の把握をすることで、国内の多様な人材を選抜する上での入試環境整備にもつながると期待できる。

１－２－１.　IB普及に関するアンケート調査

【アンケート目的】

コンソーシアム事務局ではIB教育の普及ならびに促進を目指し、IBに関した情報共有のためのICTプラットフォーム「AirCampus®」を運用している。そこで、AirCampus®の利用状況ならびに今後の改善点を把握する上でも、登録をいただいているユーザーがどのような情報やプラットフォームとしての機能を求めているかを本アンケート調査によって明らかにすることを目指す。また、この調査は継続的に行って経年変化をみることによって、プラットフォーム利用者の意識の特徴ならびにプラットフォーム運営の今後の改善点を的確に把握し、コンソーシアムの施策に必要な基礎資料を得ることを目指す。

【実施方法】

AirCampus®の登録ユーザーに対するオンラインアンケート（多肢選択・自由記述方式）

【調査内容】

―ユーザーによるAirCampus®の利用状況ならびにニーズや改善点等の把握

―AC会員のIBに関する関心意識ならびに有効な情報共有の在り方の模索

【調査対象】

AirCampus®を利用しているユーザー（教育関係者、自治体関係者、生徒、保護者等）

【調査時期】

2019年2月1日～2月28日

【個人情報の取り扱いについて】

本調査における個人情報の取り扱いについては、コンソーシアム事務局における「個人情報保護方針」に則り厳重に管理して行うこととする。

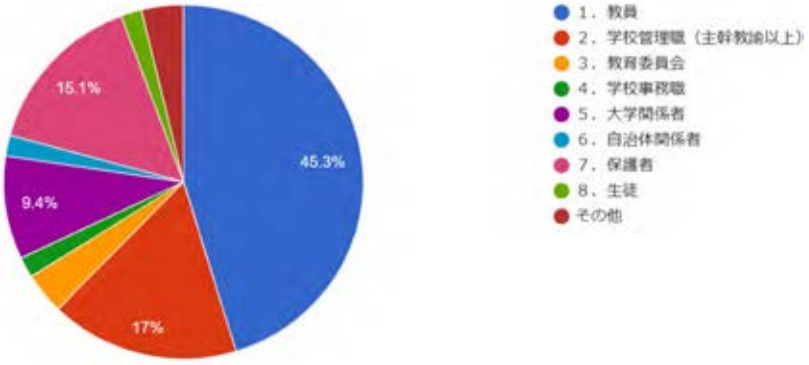
【調査人数ならびに回答数】

調査人数：251名（2月28日現在のAC登録者数）　回答数：53名

【アンケート質問項目一覧および調査結果(集計のみ)】

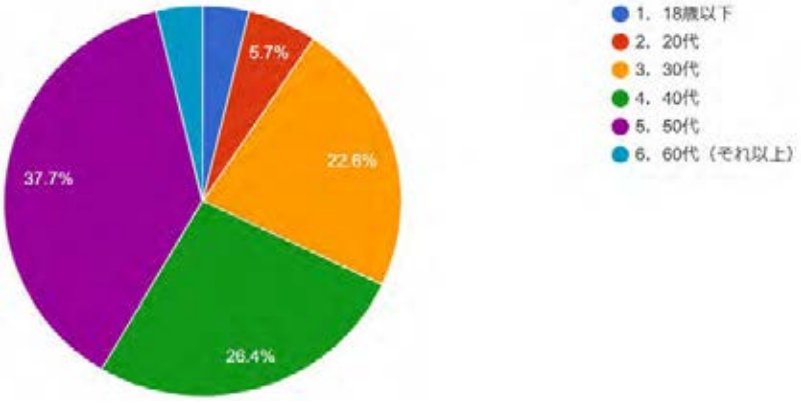
①ご自身の所属について下記より選んでください。

1. 教員［24名　45. 3%］
2. 学校管理職(主幹教諭以上)[9名　17%］
3. 教育委員会［2名　3. 8%］
4. 学校事務職［1名　1. 9%］
5. 大学関係者［5名　9. 4%］
6. 自治体関係者［1名　1. 9%］
7. 保護者［8名　15. 1%］
8. 生徒［1名　1. 9%］
9. 上記以外(自由記述)［2名　3. 8%］



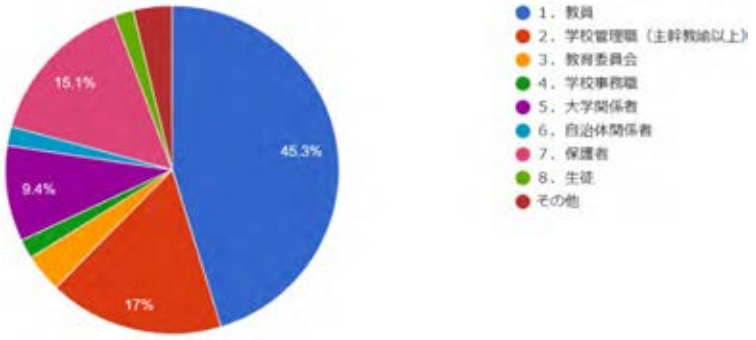
②ご自身の年齢を下記より選んでください。

1. 18歳以下［2名　3. 8%］
2. 20代［3名　5. 7%］
3. 30代［12名　22. 6%］
4. 40代［14名　26. 4%］
5. 50代［20名　37. 7%］
6. 60代(それ以上)［2名　3. 8%］



③ご自身の所属先のIB導入状況を下記より選んでください。(学校関係者のみ回答)

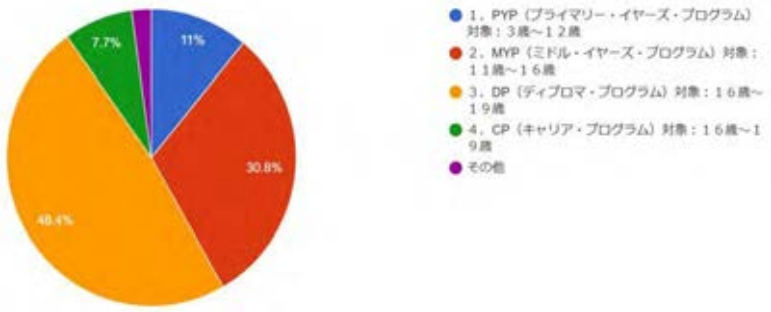
1. IB認定校［21名　39. 6%］
2. IB候補校［8名　15. 1%］
3. IB導入を具体的に検討している段階　［2名　3. 8%］
4. IBについて関心がある段階［9名　17%］
5. 未回答［10名　18. 9%］
6. 上記以外(自由記述)［3名　5. 7%］



④どの国際バカロレアのプログラムに関心がありますか。下記より選んでください。

（複数回答可）

1. PYP（プライマリー・イヤーズ・プログラム） 対象：3歳～12歳 ［10名　11％］
2. MYP（ミドル・イヤーズ・プログラム）対象：11歳～16歳 ［28名　30．8％］
3. DP（ディプロマ・プログラム）対象：16歳～19歳 ［44名　48．4％］
4. CP（キャリア・プログラム）対象：16歳～19歳 ［7名　7．7％］
5. 上記以外（自由記述） ［2名　2．2％］



⑤国際バカロレアのプログラムのどういった点に関心がありますか。自由にお答えください。（自由記述）

10の学習者像、考え抜く力、論じる力
ATL, Agency, Language Acquisition
DP資格を活かした国内外の進路の多様化
DP取得者の進路
enhanced PYPの変更された項目やその適用アイデア
IBの学習者像が本校の教育理念および生活信条に合致しているところ
MYPのプログラム
MYPやDPにおける各教科・科目・TOKの具体的な指導内容
TOKの奥深さに非常に関心があります。
TOKの批判的思考力とWOKとAOKによる分析方法。公教育の普通科の授業に取り入れることで市民教育になるから。
アクティブ相談
インクルージブな観点、ホリスティックな観点
これからの教育に必要なスキル
これからの社会に必要な力をつけられるから
シンガポールのインターナショナルスクールで日本語を担当しておりました元EYPの教師のため、日本でのEYP導入にかなり興味があります。
概念学習と協働学習、atlを用いた活動について
概念的な理解をもとにした探究学習と指導要領の資質能力の親和性に関心があります
各教科のコースアウトラインの日本語のサンプルや例のようなものが見たい。また、評価の具体的な方法について学びたい。
学んだ知識をどう関連づけて発展させていくのか、思考のプロセス

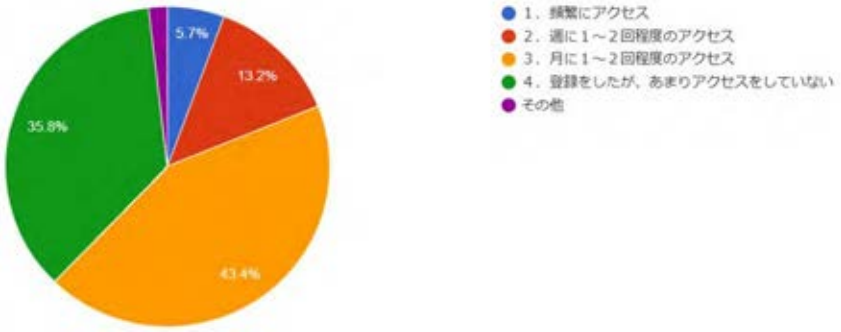
共に学習者。１０の学習者像
教育の中身と進学
国際バカロレアプログラムでの学習の進め方、使用する教材、それから教員養成
国際バカロレア入試の導入が決まっており、国際バカロレアのプログラムを大学での教育にどのように接続できるか関心がある
国際平和に貢献できる人材。社会に貢献できる人材育成
国際理解
主体的対話的で深い学びにつながる教育だと感じられる点
新しい学力観に対する評価規準がしっかりしている点
世界水準の質を保つ仕組みなど
生徒の主体的な学習プログラムであり、指導と評価の一体化が構築されていること、生徒の成績について外部評価がなされ、教員の評価力が鍛えられること。
戦後教育からの脱却、世界共通教育メソッド
探究の視点、ATT&ATLの手法
知力だけでなくマインドも育てる点
日本の公立学校への導入とその影響や効果について
日本の大学が、ＩＢ入試を導入するかどうか。　現状厳しいものがあります。
認定校において、学習指導要領の枠にとらわれる事なく学習者中心の学びを効果的に展開出来る点
認定校の抱える諸課題の共有と解決への手がかり

⑥AirCampus®のプラットフォームにおいて特にどのような情報を求めていますか。下記より選んでください。(複数回答可)

1. 各IBプログラムに関する情報［36名　14．6%］
2. IBプログラムのコース運営・経営に関する情報［27名　10．9%］
3. IBを活用した単元指導案・教材に関する情報［33名　13．4%］
4. IBプログラム導入に係る手続き・諸費用について情報［15名　6．1%］
5. 生徒や保護者によるIBへの関心度について情報［17名　6．9%］
6. IB入試・進路について情報［39名　15．8%］
7. 国際バカロレア修了生について情報［27名　10．9%］
8. 各自治体におけるIB導入の検討・推進状況の情報［21名　8．5%］
9. 国際バカロレアに関する教員養成についての情報［29名　11．7%］
10. 上記以外(自由記述)「3名　1．2%」

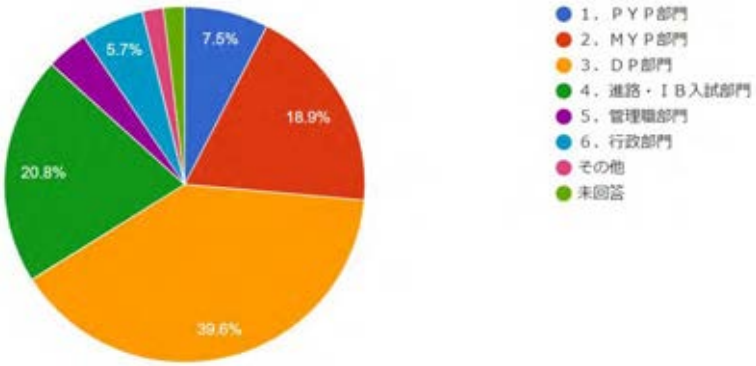
⑦AirCampus®のご自身の利用頻度について当てはまるものを下記より選んでください。

1. 頻繁にアクセス［3名　5．7%］
2. 週に1～2回程度のアクセス［7名　13．2%］
3. 月に1～2回程度のアクセス［23名　43．4%］
4. 登録をしたが、あまりアクセスをしていない［19名　35．8%］
5. 上記以外（自由記述）［1名　1．9%］



⑧AirCampus®のフォーラムのうち特にどの部門に関心がありますか。下記より選んでください。

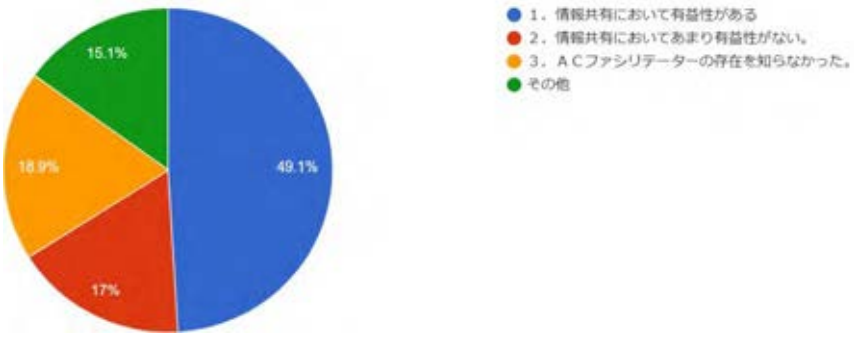
1. PYP部門［4名　7．5%］
2. MYP部門［10名　18．9%］
3. DP部門［21名　39．6%］
4. 進路・IB入試部門［11名　20．8%］
5. 管理職部門［2名　3．8%］
6. 行政部門［1名　1．9%］
7. 上記以外（自由記述）［1名　1．9%］



⑨各フォーラムにおけるAirCampus®ファシリテーターによるサポートにどのような感想をお持ちですか。下記より選んでください。

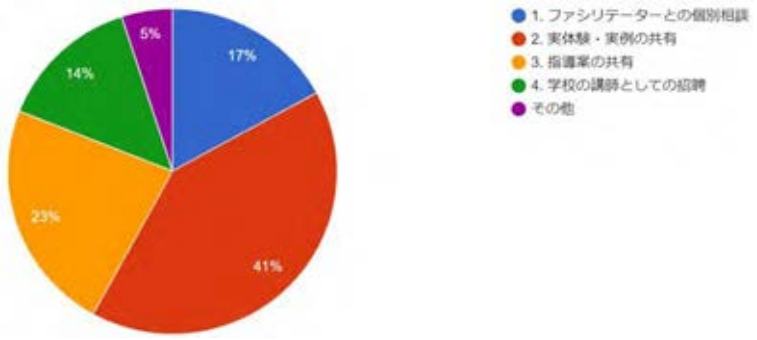
（＊ファシリテーターの方々に議論へのコメント等のサポートをいただいています。）

1. 情報共有において有益性がある。［26名　49．1%］
2. 情報共有においてあまり有益性がない。［9名　17%］
3. ACファシリテーターの存在を知らなかった。［10名　18．9%］
4. 上記以外（自由記述）［8名　15．1%］



⑩今後、AirCampus®ファシリテーターに対してどのような役割を期待しますか。下記より選んでください。（複数回答可）

1. ファシリテーターとの個別相談［17名　17%］
2. 実体験・実例の共有［41名　41%］
3. 指導案の共有［23名　23%］
4. 学校の講師としての招聘［14名　14%］
5. 上記以外（自由記述）［5名　5%］



⑪AirCampus®のプラットフォームを利用して役に立った点を教えてください（自由記述）

IBを導入しているそれぞれの学校の事例が知れること
アドバイスが得られたこと
さまざまな情報が得られた点
ディススカッションフォーラムを使用
ワークショップ参加後でも多くの先生方の情報共有が出来るところ。
学校の先生方の努力が見える
現場に則した情報が得られること。
国際バカロレアに関するイベント情報の入手
国際バカロレアに対する理解が今まで以上に深まったこと
国際バカロレア関連の情報が手に入るようになり、国際バカロレアのプログラムがより身近に感じられるようになった
情報共有ができること
新情報を得られる
申し訳ありませんが、今の所、特に感じません。（同様の回答が３名）
人とつながることができた
他校の進捗状況
認定校・候補校・関心校のレベルの違う現場の先生方の声が聴けたのが良いと思います
本当はACのプラットフォームを忘れてしまいました。
問題意識、取り組み課題が現在通っている学校とは違う事が認識できた。

⑫AirCampus®のプラットフォームの現在の機能の強化・改善が必要であるとすればそれは何ですか。自由にお答えください。（自由記述）

AirCampusにまだ慣れていないため、強化・改善点はわかりません
DP部門は今ＤＰ全体を通すものになっているが、グループごとの枠もあったらいいと思います。
フォーラムのスレッドが読みやすくなるとありがたいです。
まずは認知度の向上
学校の取り組み方の違いでオープンに出来ない情報が多々あるとは思うが，多くの学校で知りたい点がそこに隠れていると思う。所属する学校の姿勢にもよるが，その点がオープンになってくると良いと思う。
掲示板機能に関しては、ツリー形式だと一覧性がないため利用しにくい。
更新状況のメール配信
使い方の簡単的が一番だと思います。
質問への回答ややりとりが誰にでも読める状況にあるが、質問者が他者から知られたくない質問はしづらいと感じました。
若干画面がみにくいと思います。
従来の（既存の戦後教育）に携われた方々は抜本的な意識改革が必要で有りIB教育のファシリテーターとなるには困難であると理解し、生まれ変わり1からファシリテーターとしての立ち位置を身につける術を見いだして頂きたい。
特にありません　（同様の回答が計５名）
日本語DPの教材や教案の開示をお願いしたい。
認定校・候補校・関心校とジャンルを分けるのは必要。質問のレベルが違うから。一緒も大切だと思います。
保護者の立場から、先生方の悩みや現状がわかってしまうと、保護者としての質問がしにくい。
保護者も自由に入り込める環境のため、相談事がしづらい。
利用者が少ないこと

⑬AirCampus®のプラットフォームにおいてどのようなコンテンツやディスカッションがあれば参加したいと思いますか。（自由記述）

ACが主催するIB教育に関する定例の勉強会の情報発信・出席者管理など。単なる肩書・権威としてのACでは意味がないです。
CASやCPに関するものがあれば参加したいです。
IB過程における各学校独自の取り組み
IB認定校の活動の様子を動画などで配信する仕組みがあったら参加したい
Workshop in Asia Pacific
カリキュラムの作り方、国際教育の哲学、教え方
コーディネータノートの更新情報が日本語で提供されること
コンテンツ等については今までどおりで良い
ワークショップ、コア科目の運営、成績振り替え
海外留学を視野に入れた保護者間の情報共有

教案、教材、評価
教材の共有
国際バカロレアの教育実践やイベントの振り返りなど
今のところ，コンテンツに関してはこれで充分のような気がします。
最新の動き（導入に向けて、現状など）がまとまっているとよい
指導案の共有など
実体験・実際に困っている問題の提示。それに対する意見
実名を伏せた、保護者の質問に対して回答して頂ける場が欲しい。 MYPに関する一般書籍が殆どなく、情報が少な過ぎて質問が浮かばない程わからない。 英語DP、デュアルDP、バイリンガルDPの違い、其々おすすめ教材、本、 英語初学者がDPを目指す為の英語指標、取り組み方。
文科省の取り組み具合、大学側のアドミッションポリシー
母国語教育の取り入れ例やその成果

⑭AirCampus®のプラットフォーム運営以外で、コンソーシアム事務局の役割としてどのようなことを求めますか。特に重要であると思われるものを3つまで選んでください。

1. 各学校におけるIB導入までのきめ細やかなサポート支援（個別相談等）［15名　12%］
2. 一般的な国際バカロレアに関する啓発イベントの実施［22名　17．6%］
3. IBワークショップ参加への費用補助（教育関係者向け）［34名　27．2%］
4. 自治体・教育委員会向けのIB啓発イベント［11名　8．8%］
5. IBコースを有する高校進学セミナー（生徒・保護者向け）［9名　7．2%］
6. IBスコアを活用した大学進学セミナー［20名　16%］
7. IB入試導入の促す大学関係者向けのセミナー［11名　8．8%］
8. その他（自由記述）［3名　2．4%］

⑮上記の質問項目以外で、AirCampus®のプラットフォームに対する皆さんのご意見を自由にお聞かせください。（自由記述）

IB試験について、詳細に状況を共有していただきたい
IB卒業生の話(CASの工夫、大学や社会で学びがどう活用されているのか)、IBと大学受験の話、各学校の平均スコア。
関西圏での取り組みを増やしてほしい

興味のある部門から新規投稿が来たときに自動メールで知らせることや投稿ごとに連絡登録・未登録ができたら、ウェブサイト行かなくても、みんなに情報がいけます。
今後活発に利用させていただきます。
事務局の人数を増やして回転力を上げていきましょう。
自校のIB申請の情報などが全ての会員にオープンになると考えると、共有はやはり躊躇してします。多様なIBの学びのあり方などが、コンソーシアムの支援という形によって画一化しないことを望みます。コンソーシアムの役割が広すぎるので、目的が見えにくい感じも受けています。求めたい情報が、求める側のレベル感によって相当異なるのでIBの現状かと思うので、そこを切り分けないと、なかなか１つのものとして体制を固めていくのは難しいのかなと感じています。勝手な意見で失礼しました。
主催者側からの、教案や教材例の提示をお願いしたいです。
世界におけるIB取得者受け入れ大学および、本来の意味（返済不要）の奨学金制度情報
特にありません（同様の回答が計６名）
本当は、メールのおかげで初めてACが探検できました。可能性があると思います。アクティブラーニングのような雰囲気があれば素晴らしいと思います。

⑯上記の質問項目以外で、コンソーシアム事務局の活動に対する皆さんのご意見を自由にお聞かせください。（例：一般向けHPのコンテンツについて、セミナー・シンポジウムについて等）（自由記述）

IB認定校、大学、IB資格取得者によるセミナーやシンポジウムを積極的に開催してほしい。
いろいろな地域でセミナーやシンポジウムを開催していただけますと、多くの教員が参加できます。
コンソーシアムが「IBスクールを増やす」ことを最優先課題にするならば、これ以上の広がりは望めないと思います。補助金の趣旨はどうあれ、「IB教育推進」が単に「IBスクールを増やす」ことにとどまらず、non-IBスクール（将来的にもIBスクールにならない学校）への教育的影響、指導要領をベースとした教科教育への波及も見据えて運営して頂くことを切に願います。それが結果的に「IB教育推進」につながるのではないでしょうか。今でもコンテンツの情報自体は部外者も読めますが、AC自体に閉鎖的なものを感じます。もっともっとオープンなものになるとよいですね。
セミナー、シンポジウムを西日本でも開催してほしい
運営が大変だと思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。
学校を超えた生徒同士の交流の場が出来たら素敵だと思います。
関西でもTOK勉強会を開催して下さい。またTOK以外の科目の勉強会もお願いしたいです。
啓発イベントがより多く開催されることを望みます
申し訳ありませんが、あまり利用できておりません。一度認定校になるとコーディネーター間のネットワークが機能しますが、導入する前の段階での書類作成、準備の為のテンプレートなどを供給できるとハードルが下がると存じます。これらは認定校になる前の学校に参加を促す動機にはなると思います。一方で、認定がされてしまった学校をこのコンソーシアムにつなぎとめるためには、彼らにとって有益な情報を発信していくプラットフォームが必要であると感じています。
特にありません（同様の回答が計６名）
日本の試験制度（入試だけではなく、定期考査という概念など）を変えないと、真にIBが行おうとしていることは、実現できないと実感しています。国、大学との連携をおねがいいたします。
日本語に直した更新された資料が必要だと思います。

１－２－２．　国際バカロレアを活用した大学入学者選抜例の調査について

これまでに文部科学省において国際バカロレアを活用した大学入学者選抜の事例として、IBスコアを活用した大学の情報収集に取り組んできた。国内におけるIB修了生に対応した入試動向の把握をする上でも、重要な調査であり、得られた情報は海外大学におけるIB修了生の受け入れ状況と比較することでの国内の多様な人材を選抜する上での入試環境整備にもつながる。

【データの更新作業について】

昨年度まで文部科学省が調査していた「国際バカロレアを活用した大学入学者選抜例」の一覧について、各大学へ今年度の入試実施状況を問い合わせたうえで、データの更新作業を行った。

【更新に伴う調査・問合せの方法】

大学の入試課への問合せは次のようなアプローチで行った。

1. 前年度よりIB関連入試を実施している各大学へ電話による更新依頼を行った。

2. 今年度より入試を実施する大学については、新規の選抜例として入試一覧への追加許諾を　　可否を伺った。

【問合せ大学一覧・計64大学】

北海道大学／金沢大学／筑波大学／お茶の水女子大学／東京大学／東京医科歯科大学

東京外国語大学／東京藝術大学／大阪大学／豊橋技術科学大学／名古屋大学／

京都大学／京都工芸繊維大学／倉敷大学／岡山大学／長崎大学／鹿児島大学

国際教養大学／会津大学／首都大学東京／横浜市立大学／都留文科大学／大阪市立大学

千歳科学技術大学／東北福祉大学／松本歯科大学／青山学院大学／学習院大学

慶應義塾大学／工学院大学／国際基督教大学／順天堂大学／玉川大学／中央大学

東京国際大学／東洋大学／日本工業大学／日本獣医生命科学大学／法政大学

武蔵野大学／武蔵野学院大学／明治学院大学／立教大学／浦和大学／明海大学

愛知医科大学／中京大学／関西学院大学／近畿大学／京都外国語大学／立命館大学

神戸女学院大学／倉敷芸術科学大学／立命館アジア太平洋大学／東京学芸大学

創価大学／千葉大学／芝浦工業大学／西南学院大学／日本体育大学／龍谷大学／

津田塾大学／山梨大学／ビジネス・ブレークスルー大学　（順不同）

【調査により確認されたIB入試の導入予定大学・計9大学】

今回の調査により新たに下記の大学にて今年度ならびに次年度以降でIBスコアを活用した入試を予定・検討していることが調査により把握された。

東京学芸大学／創価大学／千葉大学／芝浦工業大学／西南学院大学／龍谷大学／

津田塾大学／山梨大学／ビジネス・ブレークスルー大学（順不同）

＊なお、日本体育大学については2016年度から、ビジネス・ブレークスルー大学では2014年度から入試を実施していることが調査により判明した。

【IBスコア活用に関する啓発活動】

国内のIB関連入試を実施していない大学の入試担当者と接触を図った上で、今後のIBを活用した入試の検討の可能性について情報収集を行った。

【更新作業から見えてきた課題と今後の方策について】

今回の入試一覧更新作業を通じて次のような課題が見出された。

1. IBスコアを活用した入試の解釈をめぐる問題
   - 単にIB有資格者で受験可能な大学が、「IBスコアを活用した」をうたっている場合もある。そのため、上記のような事例の中で、主だってIBスコアを活用してない大学に関しては、大学入学者選抜例からの削除を希望するケースがあった。
2. 国内のIB受験生の母集団の少なさによる懸念
   - これまでにIB入試を実施している大学の受験者数や国内のIBコースを有する学校数をみても、IB有資格者の受験者数が相対的に少ないためにIB入試の導入を躊躇する大学もある。経営の生き残りをかける大学にとってはIB修了生より一般の学生の獲得が最優先となっている。
3. IB取得科目の単位認定について
   -多くの海外大学では IBで取得した各科目の単位を大学の単位として認めているが、国内の大学ではそれが認められておらず、受験生がそのメリットを享受できないことにより、国内大学への進学を敬遠している実態もある。文科省としてもIBで取得した単位の大学での振替を認めるようにしてほしい。

上記の課題も踏まえたうえで、今後は次のような方策を検討する必要がある。

―大学にとってIB修了生を獲得するメリットは何かを啓発していくこと

―大学フェア等における興味・関心校への積極的なアプローチ（IB教育のPR関連書籍提供等）

―海外含めてのIBスコア活用状況調査

―導入検討または予定大学向けへのオンラインガイダンスやアドバイスの整備

1－3．国際バカロレア導入を検討する学校等への支援業務

国内におけるIB教育の導入において、各学校が抱える課題は多岐にわたる。実際に学校を訪問することで、現場が抱える課題やそれらに起因する根本的な原因を直接的に把握することにもつながる。ヒアリング調査の中で、見えてきた課題をコンソーシアムとして整理していくことで、それらがIB導入を検討する学校への支援材料にもつながると考えられる。また、各地域においては、生徒ならびに保護者に対するIB教育に対する初歩的な理解がまだ十分に広がっていないとの懸念の声もある。そういった中で、IBの基本的な理解のための啓発活動やSGHをはじめとしたグローバル人材育成事業との連携も事務局として積極的に取り組んだ。また、実際のIB授業のサンプル動画の撮影やIB機構との連携におけるIBENメンバー（ワークショップリーダーならびにIB認定訪問員）の募集においても精力的に取り組んだ。

1－3－1．国際バカロレアの認定校の現状について

＜世界における国際バカロレア認定校数（平成31年3月28日現在 コンソーシアム事務局調べ）

―153 以上の国・地域 5,311 校

うち PYP 実施校 延べ1,790校／MYP 実施校延べ1,563校／DP 実施校延べ 3,448 校

／CP 実施校延べ 220 校

―日本の認定校 延べ99 校

うちPYP 実施校延べ 36 校／MYP 実施校 延べ18 校／DP 実施校 延べ45 校

※1校で複数のプログラムを実施している学校があるため、プログラムごとの学校数の合計は全体の学校数と一致しないので、延べ数を表記している。

＜国内の国際バカロレアの認定校（平成31年3月28日時点）＞

	学校名	所在地	PYP	MYP	DP
1	※市立札幌開成中等教育学校	北海道		○	◎
2	※仙台育英学園高等学校	宮城県		○	◎
3	東北インターナショナルスクール	宮城県	○		
4	※秀光中等教育学校	宮城県		○	
5	つくばインターナショナルスクール	茨城県	○	○	○
6	※茗渓学園高等学校	茨城県			◎
7	※開智望小学校	茨城県	○		
8	※ぐんま国際アカデミー	群馬県			○
9	※昌平中学校	埼玉県		○	
10	※筑波大学附属坂戸高等学校	埼玉県			◎
11	アオバジャパン・インターナショナルスクール	東京都	○	○	○
12	アオバジャパン・バイリンガルプリスクール晴海	東京都	○		
13	アオバジャパン・バイリンガルプリスクール芝浦	東京都	○		
14	アオバジャパン・バイリンガルプリスクール早稲田	東京都	○		

15	インディア・インターナショナルスクール・イン・ジャパン	東京都			○
16	※開智日本橋中学・高等学校	東京都		○	◎
17	カナディアン・インターナショナルスクール	東京都	○		
18	K・インターナショナルスクール	東京都	○	○	○
19	サマーヒルインターナショナルスクール	東京都	○		
20	シナガワインターナショナルスクール	東京都	○		
21	清泉インターナショナルスクール	東京都	○		○
22	セント・メリーズ・インターナショナルスクール	東京都			○
23	※玉川学園中学部・高等部	東京都		○	○
24	東京インターナショナルスクール	東京都	○	○	
25	※東京学芸大学附属国際中等教育学校	東京都		○	◎
26	※東京都立国際高等学校	東京都			○
27	みずほスクール	東京都	○		
28	ウィロ―ブルックインターナショナルスクール	東京都	○		
29	※武蔵野大学附属千代田高等学院	東京都			◎
30	※町田こばと幼稚園	東京都	○		
31	※神奈川県立横浜国際高等学校	神奈川県			◎
32	サンモール・インターナショナルスクール	神奈川県			○
33	ホライゾン・ジャパン・インターナショナル・スクール	神奈川県			○
34	横浜インターナショナルスクール	神奈川県	○	○	○
35	※法政大学国際高等学校	神奈川県			◎
36	※聖ヨゼフ小学校	神奈川県	○		
37	※山梨学院幼稚園	山梨県	○		
38	※山梨学院小学校	山梨県	○		
39	※山梨学院高等学校	山梨県			◎
40	※インターナショナルスクール・オブ・アジア軽井沢	長野県			○
41	インターナショナルスクールオブ長野	長野県	○		
42	※松本国際高等学校	長野県			◎
43	※サニーサイドインターナショナルスクール	岐阜県	○		
44	※加藤学園暁秀高等学校・中学校	静岡県		○	○
45	アブロード・インターナショナルスクール名古屋	愛知県	○		
46	名古屋国際学園	愛知県	○	○	○
47	※名古屋国際高等学校	愛知県			○
48	※東海学園高校	愛知県			◎
49	※滋賀県立虎姫高等学校	滋賀県			◎
50	京都インターナショナルスクール	京都府	○		
51	※同志社国際学院初等部	京都府	○		
52	同志社インターナショナルスクール国際部	京都府	○		○
53	※立命館宇治高等学校	京都府			○

54	アブロード・インターナショナルスクール大阪	大阪府	○		
55	大阪YMCAインターナショナルスクール	大阪府	○		
56	関西学院大阪インターナショナルスクール	大阪府	○	○	○
57	コリア国際学園	大阪府			◎
58	※大阪女学院高等学校	大阪府			◎
59	カナディアン・アカデミー	兵庫県	○	○	○
60	関西国際学園	兵庫県	○		
61	神戸ドイツ学院	兵庫県	○		
62	マリスト国際学校	兵庫県			○
63	※AIE国際高等学校	兵庫県			◎
64	※岡山理科大学附属高等学校	岡山県			◎
65	※英数学館高等学校	広島県			◎
66	※AICJ高等学校	広島県			○
67	広島インターナショナルスクール	広島県	○	○	○
68	福岡インターナショナルスクール	福岡県	○		○
69	※リンデンホールスクール中高学部	福岡県			○
70	※福岡第一高等学校	福岡県			◎
71	オキナワインターナショナルスクール	沖縄県	○	○	
72	※沖縄尚学高等学校	沖縄県			◎
	合　計		36校	18校	45校

※・・・学校教育法第1条に規定されている学校（37校）　◎・・・日本語DP実施校（20校）

1－3－2. IB導入校・関心校・自治体へのヒアリング訪問の実施

【ヒアリング訪問概要】

国際バカロレアの各プログラムの導入に係る好事例や情報を収集するために、学校関係者へのヒアリング訪問を実施した。なお、訪問では、訪問許諾があったIB教員養成コースを有する大学、認定校・候補校・関心校に対して学校の現状やIB導入の状況、また、IBに係る悩みや要望などのヒアリングを行った。また、認定校・候補校に対しては、コンソーシアムにおいて今後推進していく授業見学や教育実習やインターンシップの受け入れについてその可否を尋ねた。

【ヒアリング訪問の実施期間】

2018年5月～2018年11月

【ヒアリング訪問先一覧】

国内のIB認定校―13校

国内のIB候補校―4校

国内のIB教員養成コースを有する大学・大学院―4校

国際バカロレアの導入を検討している学校―4校

【ヒアリングで寄せられた様々なIBに関する要望】

今回のヒアリング訪問を通じて、下記のようなIB導入に係る悩みやコンソーシアムに対する要望が得られた。これらの要望を踏まえて、次年度の活動において実現可能な方策を打ち出していきたい。

1. IBプログラムの導入のステップについて

―IBプログラムの導入を考えているが、まず何から取り掛かればよいか分からない。すべてのプログラム導入の手引きを分かりやすく情報発信してほしい。

2. IB導入係る諸費用について

―現在、ICTなどの設備を整えているが、今後、IBに係る設備投資に際限なく予算が割かれる可能性もあり不安がある。

―予算の面でも持続可能な学校経営という点において、公立学校によるIB運営には不安や懸念がある。

3. ワークショップについて

―IBワークショップの無料化措置は継続してほしい。学校としての研修予算の確保が難しい。これからも、カリキュラム改訂もあるため、引き続きワークショップに参加することが必要となるため、継続的な参加費の補助支援がほしい。

―地理的条件をネックに感じている。ワークショップはいつ首都圏なので、参加するのは大変である。地方でもワークショップを開催してほしい。

―インスクールでPYPのワークショップを開催したいが、どのように手続きをすればよいのかわからない。ぜひ自分の学校で開催可能であるのであれば、前向きに検討したい。

―オンラインでの日本語によるIBワークショップを開催してほしい。

―せっかく教員をIBワークショップに参加させても、3月に異動になると、次のワークショップまでの4ヶ月間、有資格者が不在になることもある。このタイムラグはどうすればよいのか悩ましい。

―地方でのIB勉強会や1dayセミナーのようなイベントを開催してほしい。短発のセミナーで気軽に参加できるような体制を整えてほしい。

4. コーディネーター業務について

―コーディネーターとして開設に向けての準備中であるが、IBOのHPからの適切な情報を自分が見落としていないかが心配になる。ぜひACでの情報共有を早めに開設してほしい。

5. 大学進学・進路指導について

―国内のIB入試を行う大学の受験生に要求するDPスコアが高すぎるように思われる。

―進路路指導関する情報を充実させてほしい。生徒が海外進学を目指す場合もあるので、海外の大学に関する情報をコンソーシアムからも適宜情報発信をしてほしい。また、可能であればコンソーシアム主催の大学フェアも行ってほしい。

―IB入試設計の段階において、本当に入試担当者の方がIB修了生の特質を理解できているのか疑問が残る。大学が受験生に過度なスコアの要求をしているように受け止められかねない入試の実態もあるように思われる。

―フルディプロマが取れなくても、IBの科目認定で受験を認めてくれるような学校が、日本の大学として増えてほしい。

6. シンポジウムやカンファレンス等のイベントについて

―シンポジウムやカンファレンスについて首都圏ばかりでイベントは開かずに、できれば関西やその他の地域でもIBに関するミーティングやヒアリングも含めた会合を行ってほしい。日本全　　体でIBの関心を高める動きをコンソーシアムに期待したい。

―IBワークショップでは理念的な説明が多いが、現場では授業実践の事例をもっと知りたい。
授業案や指導例や各学校などでの公開研究会などの情報を積極的に発信してほしい。

7. 保護者への情報共有について

―各地域での生徒・保護者のIB教育に対する理解を促進する上で、コンソーシアムが先頭で旗振り役となってほしい。

―学校が保護者向けにIBの説明をしても、一部の保護者にはなかなか理解してもらえない。ぜひ、コンソーシアム事務局としてIBに関する保護者向けセミナーを行ってほしい。。

―IBコンソーシアムとして、全国のIBコースがある高校が集う大規模な生徒や保護者向けのIBコース進学説明会を実施してほしい。

―IBに対するイメージが「海外進学」「英語のプログラム」というイメージが強すぎて、周辺の教育者や保護者の固定概念がぬぐえていない。国としても教育的プログラム魅力　そのものや、国内大学への進学にもつながることを強調してほしい。

8. IBの試験について

―日本語DPの試験、年に2回に受験できるようにしてほしい。11月の試験で再受験する生徒にとって1年もまたなければならず、生徒にとっても不利益となってしまう。

9. IBコース進学向けの生徒の学力診断について

―IBコースに合う生徒の資質をどのようなテストで測るようにはどうすればよいのか。できれば見本となるような事例を共有してほしい。

10. IBの授業見学・教育実習・インターンシップ等について

―学校として短期のIB教育実習生受け入れの要望があれば前向き検討したい。また長期的な派遣教師の受け入れも、受け入れとしての環境整備が整えられれば実施したい。そのための　受け入れマニュアルなどをコンソーシアムとして整理してもらえると大変ありがたい。

―自分の学校の教員も、別の学校で長期でのIB教員研修を受けることが出来たので、

環境が整えば前向きに教育実習やインターンの受け入れを行いたい。

―インターンなどは受け入れたい思いはあるが、そのためのルール作りや受け入れ体制の準備も必要である。

―大学機関としての実習連携先として、下記の学校とはすでに覚書を交わしている。引き続き、連携可能な学校を探している。コンソーシアムには大学と学校の実習連携先に関するマッチングの手助けをしてほしい。

1－3－3. IB教育のサンプル授業動画の撮影について

国内の教員からは実際の国際バカロレアの授業がどのようなものであるか知りたいという関心は多い。そこで、コンソーシアム事務局としても、各IBプログラムのサンプルの授業動画の撮影協力を国内のIB校に依頼し、授業動画の撮影ならびにAC上において一般公開した。今年度は筑波大学附属坂戸高校のプレIBクラス（高校1年生）の英語の授業をサンプル授業として公開している。次年度以降も授業動画撮影に協力してくれる学校募り、サンプルの授業動画を広く関係者と共有していきたい。

1－3－4. IBENメンバーの候補者選定の協力について

今年度は、IB機構による要請において日本語でワークショップリーダーが遂行できる人材を優先的に養成することの一環としてIBENメンバーの候補者選定の活動に取り組んだ。候補者の選定にあたっては、国内のIB認定校の学校推薦をいただくことを基本として、IBENのメンバーの条件に適う人材をコンソーシムのネットワークを通じて広報活動を行った。IBENメンバーの養成は、国内における教員養成の問題とも直結するために次年度以降もIB機構との連携を図っていきたい。

1－3－5. IB理解促進の啓発活動の実施

【IB理解促進の啓発活動について】

IB導入を検討する学校においては、現場における教職員のIBに対する理解は当然ながら深まりつつある。一方で、ヒアリング訪問時に挙がってきた学校側の悩みの中には、学校の周辺地域における生徒や保護者に対するIB教育に対する初歩的な理解については、まだ十分に広がっていないとの懸念の声も寄せられている。ヒアリング訪問先の一つであった宮城県教育委員会からは、ぜひ生徒や保護者へのIB教育の啓発活動としてコンソーシアム事務局への登壇依頼があった。また、IB教育ならびにSGHの取り組みの親和性と題して、仙台二華高等学校ならびに仙台育英学園高等学校にて共催で行われたアクティブラーニングの研修会においても、ACファシリテーターを派遣したうえでIBに関する啓発活動を行った。今後、他の自治体や学校においても同様の依頼があった場合は、IB教育の啓発活動の一環としてその期待に応えていきたい。

【啓発活動例その①：宮城県教育委員会主催による国際バカロレア勉強会への参加概要】

イベント名：「国際バカロレア教育についての勉強会」
日　時　　平成30年11月4日（日曜日）　午後2時から午後4時まで
主　催　　宮城県教育委員会
会　場　　宮城県仙台二華中学校・高等学校　体育館
対　象　　国際バカロレアの教育に関心のある方（小学生，中学生，保護者を含む）600名程度
内　容　　演題　：「 日本における国際バカロレア教育普及への期待 」
　　講師　：　小澤　大心（おざわ　こころ）　文部科学省IB教育推進コンソーシアム事務局

【啓発活動例その②：仙台二華高等学校ならびに仙台育英学園共催によるアクティブラーニング・探究活動等に関する研修会でのACファシリテーター講師派遣】

イベント名：「アクティブラーニング・探究活動等に関する研修会」
日　時　　平成31年2月16日（土）　午後1時から午後5時まで
主　催　　宮城県仙台二華中学校・高等学校、仙台育英学園高等学校
会　場　　宮城県仙台二華中学校・高等学校
対　象　　主催校教職員及び教育関係者
内　容　　演題　：「SGH と IB の親和性について」
　　講師　：　AC(AirCampus)ファシリテーター 熊谷 優一 氏（大阪市立水都中学校・高等学校）

＜仙台におけるIB啓発活動の様子＞

１－４．ICT プラットフォームの構築・運営業務

IBに関する情報共有は、これまではIB機構におけるホームページならびにIB候補校ならびに認定校の関係者がアクセスできる教員向けの会員制サイト（My IB）における情報へのアクセスが一般的であった。一方で、IBに関する国内の動向やそれらに関連した関心や疑問をより広く関係者が共有できる場として一般関係者向けの情報共有プラットフォームを構築することは有効である。そこで、今年度はコンソーシアム事務局としてICTプラットフォーム「AirCampus®」の管理およびその運営を行った。

【ICTプラットフォーム・AirCampus®について】

コンソーシアム事務局は AirCampus®（コンソーシアム会員が利用可能なオンラインによる国内のIB普及・拡大に関する情報共有プラットフォーム）の管理・運営を行う。国際バカロレア推進のための個別具体的な課題等に対して有益な協議や情報交換・ 共有の場を提供するものになることを目指し、関連の情報及び必要な知見の集積・整理を行う。なお、Air Campus の利用にあたっては、コンソーシアムの趣旨・規約等に同意し、所定の手続きを経ることで可能となる。

【コンソ――シアムにおけるAirCampus®の役割】

文部科学省IB教育推進コンソーシアムAirCampus®の目的は、以下の提供により、日本のIB認定校を増やすための普及活動に注力し、貢献することである。

―日本のIB教育に関する一般的な情報と、IBの認定プロセスを日本語で提供する。

―IB教育に関する一般的な情報、IB関連イベント等に関する情報を日本語で提供する。

―IBを知らない人からIB認定された学校のメンバーまで、幅広い方が参加できる場を提供する。

【AirCampus®ファシリテーターの選定について】

各ディスカッションフォーラムのテーマに沿った専門性を有するフAirCampus®ァシリテーター（各1～3名程度、全体15名）を配置したうえで、適切な助言や有益な情報共有ができるような環境を整えることに努める。AirCampus®ファシリテ―ターの選定にあたって、国際バカロレアに対する知見を有する者の中から文部科学省の意見を踏まえた上でコンソーシアム事務局が指名する。構成員の任期は、当該年度の3月末までとする。ただし、重任を妨げるものではない。

【2018年度AirCampus®ファシリテーターメンバー】

大迫 奈佳江　大阪インターナショナルスクール・日本語科　（PYP部門）

齋藤 真実　聖ヨゼフ学園小学校・PYPコーディネーター　（PYP部門）

大西 洋　札幌開成中等教育学校・MYPコーディネーター　（MYP部門）

前田 紘平　昌平中学校・MYPコーディネーター　（MYP部門）

熊谷 優一　YMCA・水都国際中学校・高等学校・DPコーディネーター（DP部門）

青木 一真　東京都立国際高等学校・DPコーディネーター（DP部門）

田代 淳一　茗渓学園中学校高等学校・校長（管理職部門）

石田 真理子　仙台育英学園高等学校・IBDP教務主任（管理職部門）

ダッタ シャミ　東京学芸大学教職大学院・准教授（教員養成部門）
眞砂 和典　岡山理科大学　グローバル教育センター・センター長（教員養成部門）
杉本 紀子　東京学芸大学附属国際中等教育学校・主幹教諭（進路・IB入試部門）
高木 志保　岡山理科大学　グローバル教育センター（進路・IB入試部門）
島田 康行　筑波大学・アドミッションセンター（進路・IB入試部門）
高野 和幸　高知県立高知西高等学校・副校長（行政部門）
宮地 宏明　札幌市教育委員会・総務課（行政部門）

【ディスカッションフォーラム（掲示板トピック）の設定について】

AirCampus®上のディスカッションフォーラムは以下のように構成されている。

■お知らせ： 事務局からの各種告知

■サロン： IB全体に関連する事項につき情報を共有、ディスカッションを行う

■映像資料・講演記録： IBに関わる各種講演やイベントの動画公開

■主要部門フォーラム（PYP、MYP、DP、進路・IB入試、管理職、教員養成、行政部門）

＊クローズドフォーラムを含む： 各テーマに応じた情報交換、ディスカッション

■テーマ別フォーラム（IB教育全般、初心者、企業連携）

＊クローズドフォーラムを含む： 各テーマに応じた情報交換、ディスカッション

■地域別フォーラム（北海道、東北、関東、中部、関西、中国、九州、沖縄）： 各地域に応じた情報交換、ディスカッション

【現在のACの登録者数、コンソーシアム協力校数】（2019年3月28日　19時時点）

コンソーシアム個人会員：306名

コンソーシアム団体会員：27機関

【フォーラム（掲示板）での質問事例】

―教科横断的な授業実践の見学相談（PYP）
―PYP／MYPの学校新設に関する問い合わせ（PYP）
―科目ごとに単元例や参考文献や資料を集約するスレッドの提案（MYP）
―IBと日本の学習指導要領との接点をどのように考えるか（MYP）
―DP最終試験の過去問の入手方法について・IBに親和性のある教材推薦（DP）
―各学校での開設されているIB科目の調査方法（DP）
―取得したDP資格の有効期限について（進路）
―国際バカロレア入試の導入および入試広報について（進路）
―掲示板上での情報開示の範囲について（管理職）
―管理職経験者のケーススタディの共有（管理職）

―新設するIB教員養成大学への要望（教員養成）

―IBコース大学院生としての体験談（教員養成）

―他の自治体でのIB検討・導入状況について（行政）

―IB認定校での授業見学の問合せ

【ACファシリテーターによる情報交換会】

第1回シンポジウム（2018年10月14日実施）の際に、参加者同士によるIBに関する情報交換会ならびにネットワーキング作りを行った。各ACファシリテーターの先生方には、それぞれの分科会（PYP、MYP、DP，管理職、教員養成、進路・IB入試、行政）を開き、各関係者間での情報共有を行った。次年度以降もACファシリテーターには積極的にIBに関する情報共有の場面において、IBに関する有益な情報を広く発信していただく予定である。（シンポジウムの情報交換会で寄せられたアンケート結果はP26を参照）

＜ACファシリテーターによる情報交換会の様子（第1回シンポジウムより）＞

1－5. シンポジウム等の開催業務

【シンポジウムについて】

毎年シンポジウムを開催することにより、IB教育の認知拡大、関係者間の情報共有、教育効果の確認等の広報がなされ、日本のIB教育普及を推進、日本におけるIB校数、200校を達成することが目的である。シンポジウムでは、国内外からゲストスピーカーを招聘したキーノートスピーチやIBの普及のための講演、教育効果や大きな成果が認められた内容の発表を中心とし、対外的にも積極的に情報発信を行う。運営事務局広報担当は、メディアとの接触など、シンポジウム広報担当の役割も担う。

【第1回国際バカロレアに関する国内推進体制の整備事業シンポジウム開催結果について】

＜開催場所・日時・主催等について＞

開催場所：文部科学省3階講堂（東京都千代田区霞が関3-2-2）

日時：2018年10月14日（日）13：00～17：00

主催・運営：アオバジャパン・インターナショナルスクール

後援：国際バカロレア機構

＜参加者について＞

対象：国際バカロレア教育に関心を持つ学校・大学関係者、教育委員会、自治体、
　　生徒、保護者等。

一般参加登録：501名（当日参加者は450名）

＜概要＞

「日本におけるIB教育普及・促進に向けて」をテーマとして、IBに関する基調講演ならびに国内におけるIB導入の事例紹介（学校としての取り組み、自治体としての取り組み等）とともに、IB修了生・保護者・教師によるパネルディスカッションを行った。

＜概要レポート＞

（1）開会挨拶

◆開会の辞として、文部科学省の奈良官房国際課長から、引き続き、文部科学省として国際バカロレア機構と連携し、国際バカロレア（IB）の普及・促進に取り組んでいく旨の挨拶を行った

◆主催者としてIB教育推進コンソーシアム事業の受託者であるアオバジャパン・インターナショナルスクールの柴田巖理事長からの挨拶があった。

◆国際バカロレア機構からIBワールドスクール部門のアシッシュ・トリヴェティ氏の挨拶があった。

◆IB機構の代表者であるシバ・クマリ事務局長からのビデオメッセージが上映され、日本語DPの成功やIB教育推進コンソーシアムへの期待が述べられた。

（2）第一部：基調講演

◆基調講演1：IB日本大使・東京インターナショナルスクール理事長の坪谷ニュウエル郁子氏からIB200校への期待と展望についての講演があった。

◆基調講演2：キリロム工科大学学長の猪塚武氏から、民間企業関係者の立場としての意見とともに、IB生の保護者視点から考えるグローバル人材とIBについての講演があった。

◆基調講演3：IBアジア太平洋地域日本担当開発マネージャ・玉川大学教育学研究科教授の星野あゆみ氏から、IB教員としての経験からIB教育を通じてどのような生徒が育のかについて講演があった。

(3)第二部：IB導入の事例紹介

◆実例1：高知県立西高等学校の高野和幸副校長から、高知県においてIB導入に県教育委員会職員として従事した経験等についての講演があった。

◆実例2：群馬県太田市の清水聖義市長から、自治体主導におけるグローバル人材育成の教育の取組についての講演があった。

◆質疑応答：IB教育の導入のメリット等についてのやり取りが行われた。

◆アオバジャパン・インターナショナルスクールの宇野令一郎氏から、IB教育推進コンソーシアム事業としてウェブ上で構築を進めているエアキャンパス（AC：AirCampus®）について紹介するとともに、ファシリテーターを担う教員等が登壇して紹介された。

(4)第三部：IB修了生・保護者・教師によるパネルディスカッション

◆本年3月に東京学芸大学附属国際中等教育学校のIBコースを卒業した生徒並びにその保護者が登壇し、東京学芸大学附属中等教育学校で進路指導に携わった。

（杉本紀子教諭がモデレータとなり、DPを選択した理由やそのときの状況、また、IBを学んだ意義や大学進学の理由等について様々なコメントがあった。）

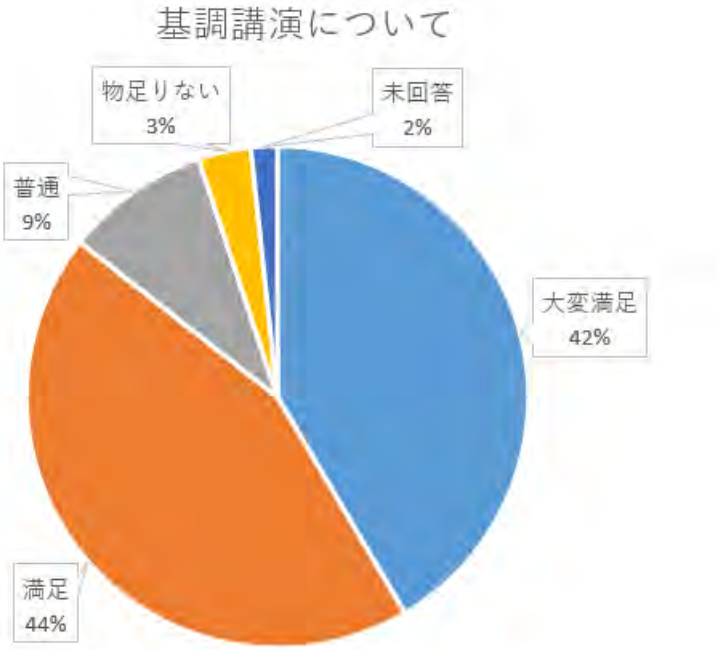
(5)会場は600席を用意したが、概ね席が埋まる等、盛況のうちに閉会した。なお、シンポジウムの模様の動画は、IB教育推進コンソーシアムのICTプラットフォーム「AirCampus®」にて視聴が可能である。

(6)情報交換会

◆シンポジウム閉会後、文部科学省1階食堂において、PYP、MYP、DP、学校管理者、進路等テーマ別に分かれて情報交換会が行われた。

＜第1回シンポジウム成果と課題（アンケート調査より）＞

―1. 基調講演について―



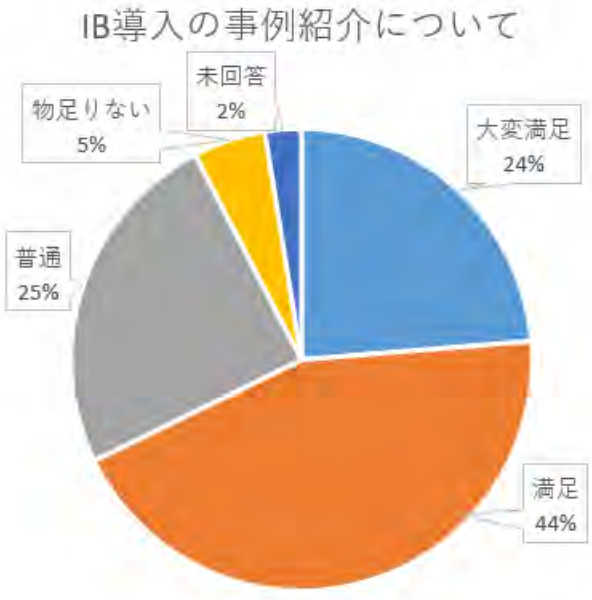
［感想と意見］　**※太字は多く寄せられた意見**

・IB全体を異なる視点でみれて参考になった。
・IB教育について理解を深められ、IBが注目される理由が分かった。
・普及、保護者、教育者それぞれの立場で異なる方向の話が聞けて良かった。
・IB国内推進状況について知ることが出来、今後のIB教育に期待が持てた。
・実際の生徒の例も非常に興味深く、IBの魅力を感じた。
・IBについて理解を深められた。
・将来、IBに何らかの形で従事したいと思った。
・現状の課題や方向性の解説が分かりやすくて良かった。
・どの講演も良かった。
・日本語対応のIBが今後の課題だと思った
・IB生の具体的な思考力や発想力の紹介が大変参考になった。
・短い時間でも要点が分かりやすくて良かった。
・コンソーシアムとしてIB教育推進にどうかかわっていく方向性なのか知りたかった。
・子供たちがグローバルな視点で自分の命を使おうとする人材に育つ話に感銘を受けた。
・調べればわかるような話も多かったが、基調講演としては十分満足。
・現状が分かり、保護者からの視点の話も良かった。
・講演者皆さん、話がとても分かりやすかった。
・IBについて再認識できた。
・特徴的な方々たちで講演自体が楽しく、IB自体への知識もつけることが出来た。
・実際に経験した方、させた保護者など、いろいろな立場の方の話が聞け、メリット、デメリットの両方が聞けて良かった。
・理念、事例、生徒の声と充実した内容で学びが深まった。
・IB側だけでなく、保護者側の話も聞け、多面的にIBを知ることが出来た。
・IBに関して知識を得たい方には、丁寧なシンポジウムだったと思う。
・教員を目指す上でのヒントになった。

・機会があるごとにIBの話を聞けると気持ちをリセットできる。
・IBについて最新のトピックについて知ることが出来た。

［要望と課題］
・1人20分は少ないと感じ、もっと長時間聞きたかった。
・講演資料にアクセスできるようにして欲しい。
・Q＆Aの時間を取って欲しかった。
・目指すものや教育像などは分かったが、導入に伴う課題や対策を聞きたかったことと、それにコンソーシアムがどう貢献するか聞きたかった。
・資料配布して欲しかった。
・自身の子供をKからIB校に通わせたが、英語と外人が嫌いな子に育ち、探求心も見られなく、理想と現実に距離を感じた。
・日本語IBではグローバル人材育成にならない仮説を感じた。
・IB修了生が企業にどう歓迎されるのか知りたい。
・内容は悪くなかったが、情報共有だけでなく、他校も学べる内容をもっと聞きたかった。
・もっと長く講演の時間を取って欲しく、パワポ資料も配布して欲しかった。
・CAS150時間、45点主義、日本語IBがフェアでない、アメリカ大学へ行きづらい等、誤った情報に注意しないとコンソーシアムの信頼をかくと思った。
・IBの具体的なメリットがみえない。
・発表者の内容が一部、不正確だったり、二名の話がかぶっていたりしたので、内容を事前に確認と調整をすべきだと思った。

―2. IB導入の事例紹介について―

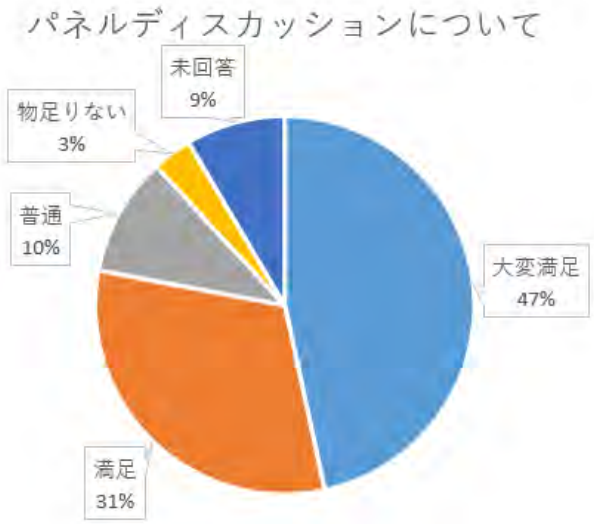


［感想と意見］
・2つの地域のそれぞれ異なる事例を聞けて参考になった。
・IB導入にかかる費用についての話も聞けて参考になった。
・IB導入の実例が聞け、大変さや工夫も聞けて良かった。
・高知の具体的なステップが分かりやすくイメージが出来た。
・実際の地方にあるIB校の様子や考え方を知れる良い機会だった。
・地方のIB校について知れて良かったと思い、自身の地元の状況についても知りたいと感じた。
・具体例の紹介は良かった。
・導入の難しさにも触れ、イメージが沸いた。

・高知とぐんま、共にIB導入の当事者の話が聞けて良かった。
・地域のニーズに対応したプラクティカルなIB導入に感銘を受けた。
・行政が積極的に先進的な教育に取り組んだ事例に強い関心を抱いた。
・具体的な話が聞けて参考になった。
・実際の教育現場での本音を聞くことが出来た。
・学校の差別化や歩み寄り方などについて考えさせられた。
・導入する大変さを知り一方で、チャレンジする大切さも感じた。
・東京だけでなく、日本各地でもIB導入の動きがあることを知れて良かった。
・高知の高野副校長の話は、現実と向き合いながらも目標に向けて進んでいく姿勢がみられて、
シンポジウムに足を運んだ甲斐があったと思った。
・IB導入の具体的な話はためになった。
・IBと学習指導要領の両立は大変だか、工夫している点が聞けて良かった。
・非常に興味深い話が聞けて、将来のロールモデルにしたいと思った。
・それぞれの立場における設立理念が分かりやすく、勉強になった。
・世界で活躍することだけに焦点をおかず、地域密着型の産業にも貢献できる人材育成のために
IB教育を活用できることを知れて良かった。
・コストがかかることだが、グローバル化と地域活性化の両立が出来ると良いと思った。
・地域の特性があると感じた。
・普段聞けない行政の話が聞けて楽しかった。
・高知の事例からはトップの決断の重要性を知り、ぐんまの事例は政治家ならではの提言が聞けて
参考になった。
・リアルな話が聞けて良かった。

[要望と課題]
・具体的なカリキュラムや授業の話をもっと聞きたかった。
・具体的な事例からイメージは持てたが、日本語と英語IBのあり方に疑問を感じ、日本としての
今後の方向性を知りたい。
・質疑応答にきちんと向き合えておらず、IBだと理科や数学、日本語での思考が出来ないのではないかという不安を保護者に抱かせる印象だった。
・IB教育による理系人材の育て方と可能性についてもっと情報共有して欲しい。
・発表者以外の参考資料も欲しかった。
・教育格差や教員不足などのデメリットにふれておらず、その対策も今後はききたい。
・一条校以外の事例も聞きたい。
・IB導入までの途中経過にあったことなども具体的に聞きたかった。
・もっと多くの事例を聞きたい。
・私立学校の導入事例も聞きたい。
・高知の話をもっと聞きたかった。
・英語の重要性、大学受験のための勉強という考え方を感じ、生涯学習のIBと少し違う話をされて
いた気がした。
・申請にあたり、苦労したこととその解決方法も聞きたかった。
・IB理解が限定されている発表者へのQ&Aを設けた理由と回答をサポートする人が必要だったと思う。
・ぐんまの話はIBより英語イマージョンの話が多く、IBから外れていた点が望ましくなかった。

―3. IB修了生、保護者、教師によるパネルディスカッションについて―



[感想と意見]
・IB生のリアルな声が聞けたのが貴重で良かった。
・日本の大学のDPスコア設定が課題だと感じた。
・具体的な体験談が非常に参考になった。
・具体的で分かりやすく、学校生活のイメージが沸いた。
・DPの能力観を大学が理解する必要があるという指摘は良かった。
・修了生の話から実際のDPの大変さや、得られた点などを聞けて、IBへの理解が深まった。
・DP修了生の話を直接聞く機会が今までなかったのでとても貴重だった。
・IB履修に関する苦労や心構えなど具体的な感想を聞けて有意義だった。
・同世代の学生でも、いろいろな考え方を持っている子がいると驚いた。
・生徒の体験談はこれからIB校入学を検討している学生や保護者にとって非常に有益だった。
・授業の様子や生徒の感想が分かりやすく参考になったので、もっと聞きたい。
・卒業生のMYPとDPの話は貴重で参考になった。
・日本の国公立での課題を共有し、解決していかなければならないと感じた。
・具体的なカリキュラムの話を生徒から聞け、IBに対するイメージがより鮮明になった。
・リアルな感想と体験が聞け、リベラルアーツを選択した生徒の話でIBの良さを実感した。
・DPの学びがリアルに分かって良かった。
・生徒と保護者の率直な意見が聞けて良かった。
・広い意味で高大接続は切実な問題なので、実際の学生の意見は大切だと感じた。
・親の希望ではなく、子供の希望が尊重されていて、親も教育に興味と理解があることを感じた。
・評価のための学習は学びを失うという点に共感した。
・保護者のIBに対する理解が大切だと思った。
・EEとCASの具体的な取り組みが参考になった。
・「勉強の定義が変わった」という生徒の声に、教員を目指す上でIB教育について学びたいと思った。
・実質的なDP内容を修了生が聞けて、とても内容豊富で正確だった。
・IB教育プログラムの子供たちに与える影響が大きいことを実感した。

[要望と課題]
・1校の代表者だけでなく、様々な学校の生徒のディスカッションを聞きたい。
・PYPの話ももっと聞きたかった。
・ファシリテーターの話が長く、保護者や生徒の話が短かった。
・予想通りの話が多かったので、Q&Aの時間を設けて欲しかった。
・インターナショナルスクールの教員のIB教育に精通しているかに疑問を抱き、PYPの効果についても

科学的な証明が欲しい。
・ディプロマ取得できなかった場合の進路や将来を見据えた選択科目の指導についても知りたい。
・外国へ進学した学生の話も聞きたい。
・もっと深く話が聞きたく、進路については数字的なデータも聞きたかった。
・質問への回答をもう少し予め整理しておいて欲しかった。
・保護者だけでの話も聞きたい。
・Q&Aの時間が欲しく、もっと生徒たちの話を聞きたかった。
・DPに関係ない人には分かりずらかったと思う。
・生徒と保護者の話を聞けたのは良かったが、形式的な話だけだったのが残念。
・次回は帰国生でない学生の話も聞きたい。
・生徒4～5人のディスカッションを見たい。
・IB専門用語に関する解説も欲しい。
・IB教員の資質が何か聞きたかった。
・都立国際高校の卒業生の話も聞きたい。
・教師側の苦労話なども聞きたかった。

＜シンポジウム後の情報交換会で寄せられた意見＞

情報交換会グループ（PYP、MYP、DP、管理職、教員養成、進路・IB入試、行政）

1．参加セッションに関してどのような関心、悩み事、疑問がありますか？

[PYPグループ]

・PYPの教員養成（既存教諭＋新規採用の違い）。

・タイムマネージメント。

・PYPと学習指導要領と並行方法。

・PYPはIBの基礎であるのに、DPに比べて、PYPの普及が遅い。

・PYPで学力が育つのか。

・UOIについて。

・教師側の技能と質問の仕方。

・PYPの情報が気軽に手に入らない。

[MYPグループ]

・MYP実施の正当性に対する不安。

・ワークショップ開催数の少なさ。

・認定に向けての言語面での不安。

・校内でのコンセンサスの取り方、教員の意識改革。

・教育の語学力。

・教育内容を一般家庭に伝えたい。

・IB導入の意義を保護者に周知できていない。

・ランニングコストがかかる。

・Eラーニング導入の可否。

・MYP成績や評価のつけ方。

・教師と保護者のマインドシフトの必要性。

・MYP日本語での資料が少ない。

[DPグループ]

・教員の質の確保。

・費用の問題。

・具体的な指導（学生の自己管理、英語力、IB導入の準備など）

・日本語DPとの違い。

・教員の自由裁量が少ない。

・IBと日本の教育の関連につながる研究。

・候補校までの手続きプロセス。

・学内での意識統一。

・コスパの問題。

・公立学校の授業料。

・DP生の国内進学の際の負担。

・TOKの評価。

・生徒募集。

[管理職グループ]

・人材の獲得と維持。

・資金の確保（施設・人件費）

・教員の負担軽減。

・MYPよりDPへの移行のやり方。

・DP授業料。

・IBOワークショップの国内実施を増やして欲しい。

・教員の交流と人事。

[教員養成グループ]

・今後のIB教員養成の広がり。

・IB教員の増加と方向性。

・IB教員の今後の需要。

・IB教員の実習。

・IB教員不足の現状。

・IBOワークショップと大学での教員免許の違い。

・IB校での現職教員。

・教員のための簡潔な教え方ガイドラインが欲しい。

・日本語IBについて。

・入試制度。

・DP経験者の声を聴き、更に興味が沸いた。

[進路・IB入試グループ]

・複雑なIB入試システム。

・大学入試に関する情報不足。

・IB学校での科目選択の工夫案内。

・国内のニーズ。

・大学入学選択幅。

・IB的な進路指導法。

・理系選択の少なさ。

・IB取得者の大学選択枠の狭さ。

[行政部門グループ]

・幼児教育部門において今後のIB導入について。

・幼稚園、保育園、こども園、認定外保育施設校へのIB導入支援。

・教員の確保。

・ビジョンの設定。

・教員養成。

・費用。

・授業料。

2. コンソーシアムの活動にどのような期待をしていますか？

[PYPグループ]

・IB教員養成について情報が知りたい。

・日本語のリソースが少ない。

・IB知名度をあげる。

・IBに初めて関心をもった人向けにも、IBついて分かりやすい情報提供。

・IBになるための課程。

・英語がメインや大学入試のためのシステムなどというIBに対する誤解を解いて欲しい。

・日本人に分かりやすい説明。

[MYPグループ]

・日本語での情報提供。

・授業実施例の情報提供。

・海外のIB校との教員交流のチャンス。

・小さな疑問も気軽に相談できる場の提供。

・大学入試に関する情報提供。
・日本の教育課程カリキュラムとのすり合わせ。
・IBの具体的な事例共有。
・MYP日本語ワークショップを増やして欲しい。
・資料日本語訳の見直し。
・新学習指導要領の評価の事例共有。

[DPグループ]

・IBの課題について、良い点、悪い点を含めて、現場の声を取り入れて欲しい。
・情報提供と情報交換会の実施。
・IBに関連する情報交換のオンラインネットワーク構築。
・ワークショップ参加のしやすさの向上。（参加費無料など）
・研究しやすい環境を整備して欲しい。
・指導案（UTP、ATP、教科教育）などの共有。
・インターナショナルスクールを含め、他校交流の促進。
・大学受け入れの情報と整備。
・ワークショップ以外の勉強会を増やして欲しい。
・一般への普及と情報提供。
・IB教員募集。
・企業からのフィードバック提供。

[管理職グループ]

・文科省が深く関心を持ち続け、関わり、支援してもらえること。
・各IB校の具体的な実施交流。
・DP導入時の生徒と保護者が参加可能な情報交換。
・教員の人材バンク。
・IBOの日本でのイベント推進。
・人事交流と人事面での情報交換。
・文科省への予算強化。（ワークショップ無料化など。）

[教員養成グループ]

・多岐な情報提供。
・FacebookID無しの情報交換の場。
・教員や生徒、行政同士のネットワーク構築。
・IB普及と認知度の向上。
・IBのメリット、デメリットの開示。
・シンポジウムの地方開催。

[進路・IB入試グループ]

・IB修了生の受け入れについての見解公表。

・大学のIB教員、成績評価等についての公的な見解の公表。

・大学入試要項データまとめ。

・IBカウンセラーやワークショップを開くようIBへの働きかけ。

・IB生の大学入学後の実績調査まとめ。

・教員同士のカリキュラム実施例や教え方の情報交換。

・IB生や教員同士での悩み共有。

・IB普及。

・Cat2ワークショップをして欲しい。

・IB認定校になるための事務作業を減らせるような活動。

・生徒向けIB授業の紹介。

・地方と首都圏の情報格差解消。

・人材バンク。

[行政部門グループ]

・教育委員会、学校関係者、企業、文科省、IBOとの情報共有の場提供。

・IBの周知活動。

・日本の教育とIB教育の融合情報の提供。

・エアキャンパスでの情報提供。

3. 自身がコンソーシアムの活動に貢献できるとしたら、どんなことが挙げられますか？

[PYPグループ]

・教育、学校関係者、保護者、企業間の情報をつなぐ役割を担うことを貢献したい。

・関心校、候補校の教職員による認定校の見学と訪問支援。

・現場の困っていることを詳しく共有できる。

・学生には普及活動に貢献できる。

・IBの研究をしている立場として活動。

・学習指導要領を踏まえた視点からPYPについて情報共有。

・PYP、MYP、DPの流れをつなげられるようにしたい。

[MYPグループ]

・関心校や候補校としての率直な質問や疑問を共有。

・ワーキンググループをつくる。

[DPグループ]

・会場提供。

・研究成果の提供シェア。

・活動例シェア。

・リソースの提供。

・DP要素を授業の中に入れる方法のシェア。

・失敗例や不明な点、卒業生が出た場合の進路データなどのシェア。

[管理職グループ]

・コンソーシアムへの参加と場所の提供（学芸大学）

・エアキャンパスへのコーディネーター派遣。

・デュアルと英語ディプロマの課題を共有。

・文科省への働きかけ。

[進路・IB入試グループ]

・高校と大学からのデータ提供。

・大学（入試部門）、IB高等学校、保護者間でのワークショップ開催。

・IB生や保護者の悩み共有。

・IB教員養成コース大学生と現場教員とのつながり。

・指導案提供。

＜第1回シンポジウムの様子＞

【第2回国際バカロレアに関する国内推進体制の整備事業シンポジウム開催について】

＜開催場所・日時・主催等について＞
開催場所：文部科学省3階講堂（東京都千代田区霞が関3-2-2）
日時：2019年3月16日（日）13：00～17：00
主催・運営：アオバジャパン・インターナショナルスクール
協力：立命館大学一貫教育部
後援：国際バカロレア機構、立命館大学大学院教職研究科

＜参加者について＞
対象：国際バカロレア教育に関心を持つ学校・大学関係者、教育委員会、自治体、大学生等
一般参加登録：130名（当日参加者は98名、ライブ中継視聴者8名）

＜概要＞

「日本におけるIB教員養成」をテーマとし、IB教員養成に関心のある学生ならびに教育関係者を対象としてシンポジウムを開催した。シンポジウムの各セッションでは、大学学部や大学院によるIB教員養成の事例紹介、IB教員研修の取り組みに関する事例共有、ならびにIB現職教員によるパネルディスカッションを行った。

＜概要レポート＞

（1）開会挨拶

◆コンソーシアム事務局より、今年度のコンソーシアム活動報告および来年度に向けたIB普及促進の啓発活動について方向性が示された。

◆会場提供をいただいた立命館一貫教育部を代表して常務理事の小畠敏夫氏より、立命館学園としてのIB推進への取り組み事例の紹介（例：立命館宇治高等学校でのIBコース、立命館大学の教職大学院におけるIB教員養成につながる取り組み）を交えながら挨拶をいただいた。

◆文部科学省の宮本国際協力企画室長より、引き続き文部科学省として国際バカロレア機構と連携し、国内のIB教育の普及・促進に取り組んでいく旨の挨拶をいただいた。

◆IB機構を代表してアシッシュトリベティ氏は、今回のテーマである教員の養成の重要性と教師自身がアクティブラーニングを通じた全人教育を推奨できる人材となることへの期待を述べた。

（2）第一部：大学学部・大学院による講演

◆第一部のセッションでは、8大学（国際基督教大学、都留文科大学、東京学芸大学、立命館大学、筑波大学、岡山理科大学、武蔵野大学、玉川大学）より、IB教員養成に関する取り組みの事例紹介を行った。講演では学部・大学院の設置意義、カリキュラムの内容、実際の授業等について詳しく説明を行った。

（3）第二部：学校におけるIB教員研修の受け入れの取り組み

◆東京学芸大学附属国際中等教育学校では、国立大学の付属校として、公立学校の現職教員の研修の場としてこれまでに多くの公立学校からの派遣教員を受け入れてきた。派遣元の学校の多くがIB認定を目指しており、IB機構によるワークショップの研修とは異なる形で、国内のIB教員養成に寄与す

る校内研修の事例紹介を行った。学校としては、教員研修の受け入れにより得られた好事例と浮かび上がった受け入れにおける課題をもとに、今後の研修改善を図っていくとの報告があった。

(4)第三部:現職IB教員によるパネルディスカッション

◆第三部のセッションでは、司会の明治大学国際日本学部教授の佐藤郡衛氏のファシリテートの下で現職IB教員をパネリストとして迎え、日本におけるIB教員養成の諸課題とその方策について議論を行った。パネリストとして高知県立高知国際中学校の佐野武氏、岡山理科大学附属高等学校の三垣雅美氏、立命館宇治中学校・高等学校のトーマス・マシュー氏が登壇し、IB教員養成大学での実際のコース履修の体験談、学校職場から見えてくる教員研修の課題、IB教員の専門性や力量、教員養成の質保証等について幅広い観点で議論を行った。

(5)シンポジウムの同時ライブ配信(第2回シンポジウムより初整備)

当日はシンポジウムの同時ライブ配信を行い、オンラインによるシンポジウムの視聴環境の整備を行った。なお、当日のシンポジウムの講演録画については、IB教育推進コンソーシアムのICTプラットフォーム「AirCampus®」にて視聴が可能である。

(6)情報交換会

◆シンポジウム閉会後、IB教員養成研修に関する情報交換会として、一般教育者向けの分科会ならびに教育委員会向けの分科会を実施した。一般教育者向けの分科会においては、ACファシリテーターの方にもグループディスカッションに参加いただき、教員養成・研修に関する様々な情報共有を行った。また、教育委員会向けの分科会においては、IB機構より日本におけるIBプログラム導入の動向についての説明が行われた。

＜第2回シンポジウム成果と課題（アンケート調査より）＞

全体回答数：50（うち、有効回答数：38　無効回答数12）

―1．基調講演について―

1．第1部：「IB教員養成の事例紹介」大学学部・大学院講演についてあてはまるものを下記より選択ください。

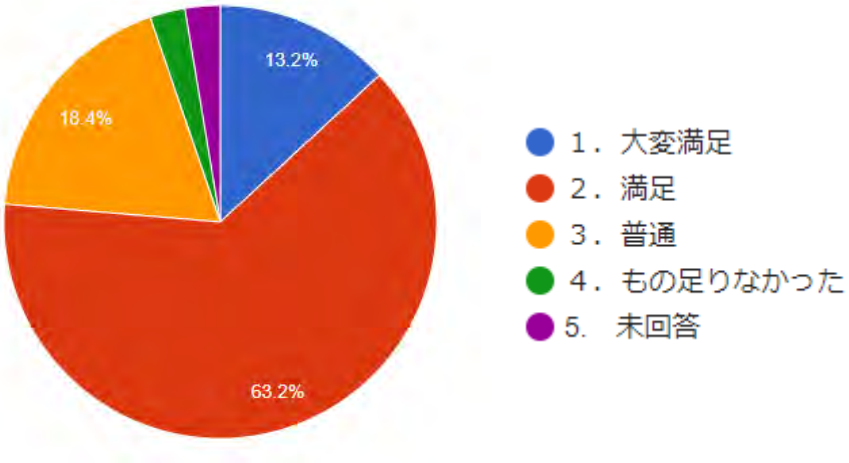
1．大変満足　　［5名　13．2%］

2．満足　　［24名　63．2%%］

3．普通　　［7名　18．4%］

4．もの足りなかった　　［1名　2．6%］

5．　未回答　　［1名　2．6%］



2．上記選択した理由をお聞かせください。（自由記述）

・各大学、持ち時間が少なかったのでは。 IB養成課程を作ることのメリットと、どんな授業をされているか、具体的に話していただきたかったです。

・今日のパネルディスカッションで現職の先生が学生だった経験のころ（?2017年）と比べて、これから育成されていく学校について知ることができた点がよかったです。私としては、現職教員（教員免許取得者）が在職のままワークショップ受講でなく、IB教員の資格（IBCTL、IBACTLR）の認定を受け、自信をもって指導できる体制はこれからだな、と感じています。

・関西の大学も一層増えることを希望します。

・急激に変化する社会において、IBの学びが広く日本の教育界に広がることが重要であると考えております。その意味でIB教員養成が増えることを願っております。

・説明とプレゼンの差異が際立っていました。やはりIB教員養成が実践されている学校と計画中の学校では迫力の差がありますね。

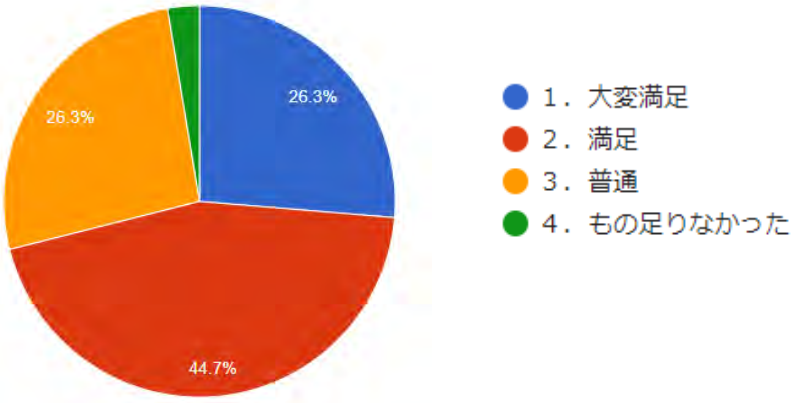
・岡山理科大の真砂先生の発表がとても興味深く、どのような教員になることが求められているのかがよく分かりました。具体的にこれまでの教員養成プログラムと何が異なるのかはっきり見えて良かったです。発表数が多いためか、大学の広報の枠を出ていない。もう少し具体的な成果や問題点への対応等を聞きたかった。

・各校15分の予定でしたが、ポスターセッション的にして時間を延ばし、もう少し詳しい内容をお聞きしたかった。

・多様な有り方が紹介され、勉強になりました。

3. 第2部：学校におけるIB教員研修受け入れの取り組みについてあてはまるものを下記よりご選択ください。

1. 大変満足　［10名　26. 3%］
2. 満足　［17名　44. 7%］
3. 普通　［10名　26. 3%］
4. もの足りなかった　［1名　2. 6%］



4. 上記選択した理由をお聞かせください。（自由記述）

・現状かなり大掛かりな費用がかかるものなので、普通の高校にはかなり敷居が、高いものように思えます。

・これからの研修受入になると思いますが、IB教員になる学生の受入が広がり、またその成果が、今後開かれるシンポジウム等で聞けることを期待しています。

・他の学校のIB教育の様子を見ることができ、すごく参考になりました。

・IB教員研修においての研修の重要性を知ることが出来ました。

・附属国際中等の先生方がover workになりませんように。

・受け入れる側の先生方にとっても、研修を通して得られるものがある仕組みになっているのはいいと思います。

・こちらももう少し具体例を聞きたかった。

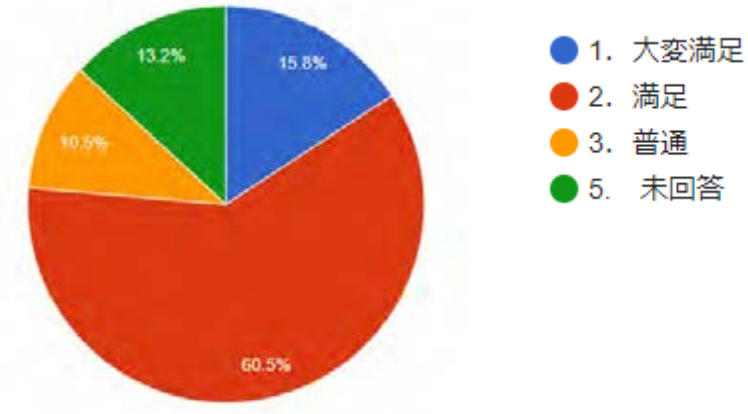
・学芸大の取り組みの一端を紹介して頂き、イメージが沸きました。受け入れる側の先生の工夫や苦労がよく分かりました。

・大変な努力をされている様子で感動しました。スピードについていくのが少ししんどかったです。

・特別な事例のように感じた。もう少し軽いIB教員研修の受け入れがあれば良いと思う。

5. 第3部：現職IB教員によるパネルディスカッションについてあてはまるものを下記よりご選択ください。

1. 大変満足　［6名　15. 8%］
2. 満足　［23名　60. 5%］
3. 普通　［4名　10. 5%］
4. もの足りなかった　［0名　0%］
5. 未回答［5名　13. 2%］



6. 上記選択した理由をお聞かせください。（自由記述）

・具体的な話をきけてよかったです。
・佐野先生、三垣先生の経験や体験談、参考になりました。また、マシュー先生の言っていた「初等中等教育で育てようとしている人材」と「企業の求めている人材」とが一致しているにもかかわらず、日本の大学組織とのギャップがある点や、三垣先生がお話しされていた、一条校とIBのライセンスとの兼ね合いで教壇に立てないといった点は、特別非常勤講師などの措置などで対応できないものか、と思ってしまったりしました。ワークショップリーダーを「見つける」でなく「作る」そして「育てていく」体制をこれから作っていくことが必要であると気がつきました。佐藤教授のセッションはじめに話されたIBとの出逢い、そして次につながる最後のまとめに思いがこもっていると感じています。
・玉川と筑波の大学院の実際が良くわかりました。現職IB教員というよりも、IB教員養成修了者のディスカッションでしたね。
・WSと大学院の違いが良く分かりました。現職の教員のための大学院進学や修学のサポートがしっかりあるといいなと思いました。（スケジュール、オンラインコース、金銭的なサポートなど。）
・先生方の生の声を聞くことが出来て、有用な情報が得られました。
・それぞれ実体験を通して語って頂けたのが大変良かったです。IBEC保持者の数を増やすことと同様、佐藤先生の質問にもあったように、一般の教職課程がいかに変われるかが最も本質的だと思いました。
・具体的な問題を議論されていたので、問題点がクリアになっていた。
・IB教員を目指した思いとその効果を知ることが出来た。
・佐野先生と三垣先生のお話、ご意見を伺えたことは「ため」になりました。マシューさんからのお話も日本のIBを少し離れた視点からお話頂き、日本のIBのグローバルな視点からの課題が分かり興味深かったです。
・色々な本音が聞けて良かったです。今後ともよろしくお願いいたします。

7. 全体の感想、及び教員養成に関して、今後コンソーシアムに実施して欲しいこと（具体的な要望 等）（自由記述）

・なかなか言葉ではわかり得ないことも多いので、もっとビデオ等を使っての風景も示してもらったほうが分かりやすいと思います
・現在、情報科の免許を所有しております。高等学校の情報科とDPに対応するであろうComputer SciencesやInformation Technology in Global Societyとの関係に興味を持ち続けていたこと、また、母校がIBコースを認定され、卒業生を出したこともあり、今日は参加をいたしました。武蔵野大学の説明配布資料の中で、次年度も文科省は「国際バカロレアの推進」ということで、予算請求を増額しており、引き続き、注視していきたいと思います。今日はありがとうございました。
・本日は貴重な機会を頂き、ありがとうございました。教員養成に関してではありませんが、IB取得科目が大学入学後の単位認定できるようご検討頂きたいと考えております。よろしくお願いいたします。
・第3部がやはり最も面白かったです。短い時間で参加者も多様なので、色々な立場からの一つのトピックに対する見解をプレゼンしてもらうのでいいんじゃないですかね。
・プログラム紹介などよりも、実施報告などが聞けるチャンスがあるといいなと思います。
・教員養成に関して多くの情報を得られました。IBの実際的なカリキュラムの内容を知りたいと思いました。通常の公立校の学習と何が違うのか？教えて頂きたいです。
・大変貴重な機会を頂き、ありがとうございました。初めてということでしたが、これからも是非、関西での開催をお願いします。

・大学と教育現場との考え方の差が大きい気がしました。大学が変化して動き出さないと変わらないと思います。
・現在のIB教員養成を分かりやすく理解することが出来ました。これからIB教員になりたいと思っていたので、そのためにどういった道をつけていけばいいのかヒントを得るきっかけになりました。学部生のため、なかなかIBを学ぶ機会が少ないため、今後学部生も参加できるワークショップなどを実施して下さると嬉しいです。
・テーマが教員養成に特化していたことで焦点化され、分かりやすかったと同時にじっくり考えることが出来た。

＜第2回シンポジウムの様子＞

2. 業務運営における今年度の成果概要および次年度以降に取り組むべき課題

1. 文部科学省 IB 教育推進コンソーシアム運営業務

【今年度の成果】

―関係者協議会の発足および運営

―IB普及促進における諸課題の整理ならびに優先事項の順位付け

―IB普及に関する諸課題への課題解決アプローチの提案

―日本語DP連絡協議会からの事業継承（コンソーシアム団体会員・協力校制度の創設）

【次年度に取り組むべき課題】

―2018年度の関係者協議会で指摘されたIB普及促進における諸課題への解決のためのアプローチに対して、短期的かつ長期的な視点による優先事項の順位付け。

―上記の課題の解決のために、コンソーシアム事務局として速やかに実行できるアクションプランの策定

―諸課題の解決に向けてコンソーシアムを構成する諸機関がそれぞれの役割の中で有機的に結びついたうえで、有効な方策を打ち立てることができる環境整備

―IBAJならびに国内のIBネットワーク（例：コーディネーター等）との連携強化

―コンソーシアム団体会員ならびに協力校の拡大

2. 国際バカロレア教育の効果に関する調査研究業

【今年度の成果】

―IB普及に関するアンケート調査の実施（ACユーザー対象）

―国際バカロレアを活用した大学入学者選抜例の更新作業

（新たにIB関連入試の実施の確認された大学の追加）

【次年度以降に取り組むべき課題】

―IB教育の効果と普及への諸課題把握のために、様々なステークホルダーへのアンケート等の実施の継続

＊調査内容：認定校・候補校・関心校ならびにIB導入に関心のある自治体を対象した調査の実施（2019年度予定）

―日本国際バカロレア教育学会をはじめとした国内の研究実績のあるIB教育研究機関ならびに研究者との調査研究の連携

＊研究連携案：国内大学・海外主要大学のIB入試実施状況の調査

日本の教育とIB教育の効果比較研究

IB修了生のキャリアパス追跡調査 等

IB普及・促進に寄与する研究セミナーの実施（毎年10月予定）

3. 国際バカロレア導入を検討する学校等への支援業務

【今年度の成果】

―IB認定校、候補校、関心校へのヒアリング訪問の実施

（学校現場が直面する課題調査：1. IBプログラムの導入のステップについて
2. IB導入係る諸費用について
3. ワークショップについて
4. コーディネーター業務について
5. 大学進学・進路指導について
6. シンポジウムやカンファレンス等のイベントについて
7. 保護者への情報共有について
8. IBの試験について
9. IBコース進学向けの生徒の学力診断について
10. IBの授業見学・教育実習・インターンシップ等について）

―IBのサンプル授業動画の公開（AirCampus®にて公開）

（例：筑波大学附属坂戸高等学校におけるプレIBの動画公開）

―IB関連の基礎情報（認定校情報等）の更新

―IBENメンバーの候補者選定の協力

―IB教員養成のためのシンポジウムの開催

―IB理解促進のための啓発活動の実施

（例：宮城県教育委員会主催による国際バカロレア勉強会での参加
アクティブラーニング・探究活動等に関する研修会in仙台へのACファシリテーター派遣）

【次年度以降に取り組むべき課題】

―国内のIB教員養成機関、IB認定校・候補校・関心校へのヒアリング訪問の継続

―コンソーシアム協力校間におけるネットワークの促進

（授業見学・サンプル授業動画撮影・教育実習の受け入れ、イベント・セミナー等における実施協力）

―IB理解促進の啓発活動の実施

＊各地方都市でのIB理解セミナーを開催（半期・4都市で実施）

沖縄・九州／中国／四国／近畿／中部／北陸／関東／東北・北海道

―IBENメンバーならびに試験官の採用活動の継続（IB機構への必要な情報提供）

4. ICT プラットフォームの構築・運営業務

【今年度の成果】

―コンソーシアムHPの運用ならびに会員ポータルサイト「AirCampus®」の運営

―ACファシリテーター制度によるIBに関連した情報共有支援体制の構築

―IB普及コンテンツの作成・配信

（例：サンプル授業動画、シンポジウムの講演動画の公開）

―コンソーシアム団体会員ならびに協力校制度の創設（前日本語DP連絡協議会の活動継承）

【次年度以降に取り組むべき課題】

―ACファシリテーターとの対面型の情報交換会の実施（年2回程度）

＊シンポジウムやIB理解セミナーに合わせて、対面型の情報交換会を全国各地で実施していく。（参加者同士のネットワークの促進）

―ACに参加しているコンソーシアム協力校・機関との協力体制の構築

＊教育実習の促進・授業見学に関する情報をAC上でコーディネートする

―ACにおけるコンテンツのさらなる充実

（例：授業指導案の公開、各プログラムにおけるサンプル授業の公開　等）

5. シンポジウム等の開催業務

【今年度の成果】

―国際バカロレアに関する国内推進体制の整備事業シンポジウム開催

第1回：国際バカロレアの普及促進に係る基調講演ならびに事例紹介

第2回：日本におけるIB教員養成の今後の発展に向けて

【次年度以降に取り組むべき課題】

IB普及促進に寄与するシンポジウムの実施（年2回）

―今後考えられるシンポジウムテーマ

各IBプログラムによる授業実践／大学におけるIB修了生の受け入れの現状と課題／IBスコアを活用した大学入試の事例共有／自治体におけるIB導入をめぐる諸課題共有（地方創生と新たな学校づくり（IB校モデルの紹介）／IB修了生のキャリアパス紹介（産学連携でのグローバル人材）／SSH・SGH・SGUとIB教育の連携

3. 付録

第1回～第3回の関係者協議会資料一式

第1回関係者協議会資料一式

第2回関係者協議会資料一式

第3回関係者協議会資料一式